

平安京左京三条三坊十町跡・  
烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







平安京左京三条三坊十町跡・  
烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、ビル建設工事に伴う平安京跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 22 年 5 月

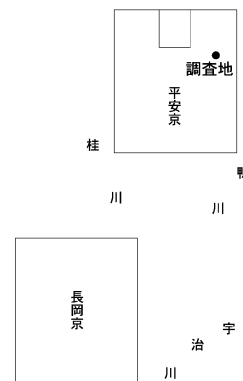
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡
- 2 調査所在地 京都市中京区両替町通姉小路上る龍池町 448 番 1、449 番 1
- 3 委 託 者 大和ハウス工業株式会社 京都支店 支店長 栗原孝哉
- 4 調査期間 2010 年 1 月 7 日～ 2010 年 3 月 19 日
- 5 調査面積 223 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 柏田有香
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「聚楽廻」「御所」「壬生」「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 土器類・瓦類・金属製品・石製品ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 柏田有香
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 宗教法人本願寺、五十川伸矢、植山 茂、梅本康広、大場 修、緒方香州、尾下成敏、片山まび、河内将芳、國下多美樹、高 正 龍、鈴木久男、永井規男、永井正浩、西山良平、二條絵実子、浜中邦弘、福島克彦、古川 匠、降矢哲男

（敬称略）



（調査地点図）

0 2 4km



# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	2
3. 遺 構	5
(1) 基本層序	5
(2) 1区第1面の遺構 江戸時代中期以降	7
(3) 1区第2面の遺構 江戸時代前期	10
(4) 1区第3面の遺構 安土桃山時代	11
(5) 1区第4面の遺構 室町時代後期	16
(6) 1区第5面の遺構 鎌倉時代から室町時代前期	19
(7) 1区第6面の遺構 平安時代	21
(8) 2区第1面の遺構 江戸時代	24
(9) 2区第2面の遺構 安土桃山時代以前	24
4. 遺 物	26
(1) 土器・陶磁器類	26
(2) 瓦類	34
(3) 金属製品	36
(4) 石製品	37
5. ま と め	43
(1) 調査地の遺構の変遷	43
(2) 堀160の性格について	44
(3) 浴室遺構について	45

# 図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区第1面全景（北西から）
		2	1区第2面全景（北西から）
図版2	遺構	1	石室10（西北西から）
		2	炉1（東から）
		3	溝49（西から）
		4	土坑50（西から）
図版3	遺構	1	1区第3面東半全景（北から）

	2	竈 57・66、落ち込み 63（東北東から）
	3	井戸 153（南東から）
図版 4	遺構	1 竈 57（北から）
		2 竈 57 埋没状況（北から）
		3 竈 57 断面（北西から）
図版 5	遺構	1 1区第4面東半全景（北から）
		2 1区第4面西半全景（北東から）
		3 1区第5面西半全景（北東から）
図版 6	遺構	1 1区第5面東半全景（北から）
		2 堀 160 断面（北から）
		3 土坑 101（北から）
図版 7	遺構	1 1区第6面東半全景（北から）
		2 1区第6面西半全景（北東から）
		3 溝 120（北西から）
図版 8	遺構	1 2区第2面全景（西から）
		2 2区第1面全景（西から）
		3 石組 207（南東から）
図版 9	遺物	平安時代・鎌倉時代の土器・陶磁器類
図版 10	遺物	室町時代・安土桃山時代から江戸時代初頭の土器・陶磁器
図版 11	遺物	江戸時代の土器・陶磁器類
図版 12	遺物	瓦類
図版 13	遺物	金属製品・石製品

## 挿 図 目 次

図 1	調査前全景（北北東から）	1
図 2	作業風景	1
図 3	調査区配置図（1：300）	2
図 4	調査地位置図（1：2,500）	3
図 5	1区南壁断面図（1：100）	6
図 6	2区西壁断面図（1：100）	7
図 7	1区第1面平面図（1：100）	8
図 8	1区第2面平面図（1：100）	9
図 9	炉 1 実測図（1：20）	10

図 10	1区第3面平面図 (1:100)	12
図 11	浴室遺構平面図 (1:50)	13
図 12	竈 57・66、土間、堀 160 断面図 (1:50)	14
図 13	竈 57 平・立面図 (1:50)	15
図 14	井戸 153 実測図 (1:40)	16
図 15	1区第4面平面図 (1:100)	17
図 16	1区第5面平面図 (1:100)	18
図 17	土坑 101 実測図 (1:20)	19
図 18	1区第6面平面図 (1:100)	20
図 19	溝 120 断面図 (1:40)	21
図 20	2区第1面平面図 (1:100)	22
図 21	2区第2面平面図 (1:100)	23
図 22	石組 207 実測図 (1:40)	24
図 23	土坑 210 実測図 (1:40)	25
図 24	落ち込み 118、土坑 177、溝 120 出土土器実測図 (1:4)	27
図 25	第5面整地層出土土器実測図 (1:4)	29
図 26	土坑 101、堀 160 出土土器実測図 (1:4)	29
図 27	竈 57・66、落ち込み 63、石組 207、土坑 210、井戸 153 出土土器実測図 (1:4)	31
図 28	土坑 74・1 出土土器実測図 (1:4)	32
図 29	土坑 17 出土土器実測図 (1:4)	33
図 30	瓦拓影および実測図 (1:4)	35
図 31	金属製品実測図 (1:2)	36
図 32	石製品実測図 (1:4、1:8)	37
図 33	安土桃山時代遺構配置図 (1:500)	45
図 34	黄鶴台図	47
図 35	浴室遺構イメージ図	48

## 表 目 次

表 1	周辺調査概要表	4
表 2	遺構概要表	5
表 3	遺物概要表	26
表 4	土器・陶磁器類一覧表	38



# 平安京左京三条三坊十町跡・ 烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡

## 1. 調査経過

調査地は、御池通と両替町通の交差点の北西角に位置する。平安京の条坊復元では左京三条三坊十町にあたる。また、弥生時代から古墳時代の集落跡である烏丸御池遺跡、鎌倉時代から室町時代の押小路殿・二条殿、安土桃山時代の二条殿御池城跡にも該当する。

今回、当敷地にオフィスビルの建設が計画されたため、工事に先立ち発掘調査を行うこととなった。調査は、試掘調査と周辺調査の成果を受けて、過去の調査で見ついている二条殿の庭園の広がりや歴史の変遷を明らかにするとともに、下層の烏丸御池遺跡に関連する弥生時代の遺構の発見、またこれまで考古学的には確認されていない織田信長が築いた二条御新造（二条殿御池城）に関連する遺構の発見と実態解明を目的とした。

発掘調査は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）の指導のもと実施した。調査面積は223㎡である。掘削土を場内処理するため、南半の1区と北半の2区に分けて反転調査を行った。1区は遺構面の残存状態が良く、6面（第1面：江戸時代中期以降、第2面：江戸時代前期、第3面：安土桃山時代、第4面：室町時代後期、第5面：鎌倉時代から室町時代前期、第6面：平安時代）の調査を行った。2区では江戸時代の遺構が調査区の大半を占め、中世以前の遺構の残存状況が悪かったため、2面（第1面：江戸時代、第2面：安土桃山時代以前）の調査を行った。検出した主な遺構には、江戸時代の井戸や土坑、安土桃山時代の竈・井戸・土間からなる浴室遺構、石組遺構、室町時代の堀や溝、鎌倉時代の溝、平安時代の三条坊門小路北側溝内溝、落ち込みなどがある。これらの遺構については、それぞれの遺構面において記録作業を行い、各遺構面の調査時には文化財保護課の検査と指導を受けた。

なお、浴室遺構を構成する竈2基については、考古学的には平安京域において初の発見例である。また二条御新造に関わる遺構である可能性もあり、当時の生活文化を知る上で重要性が高い遺構



図1 調査前全景（北北東から）



図2 作業風景

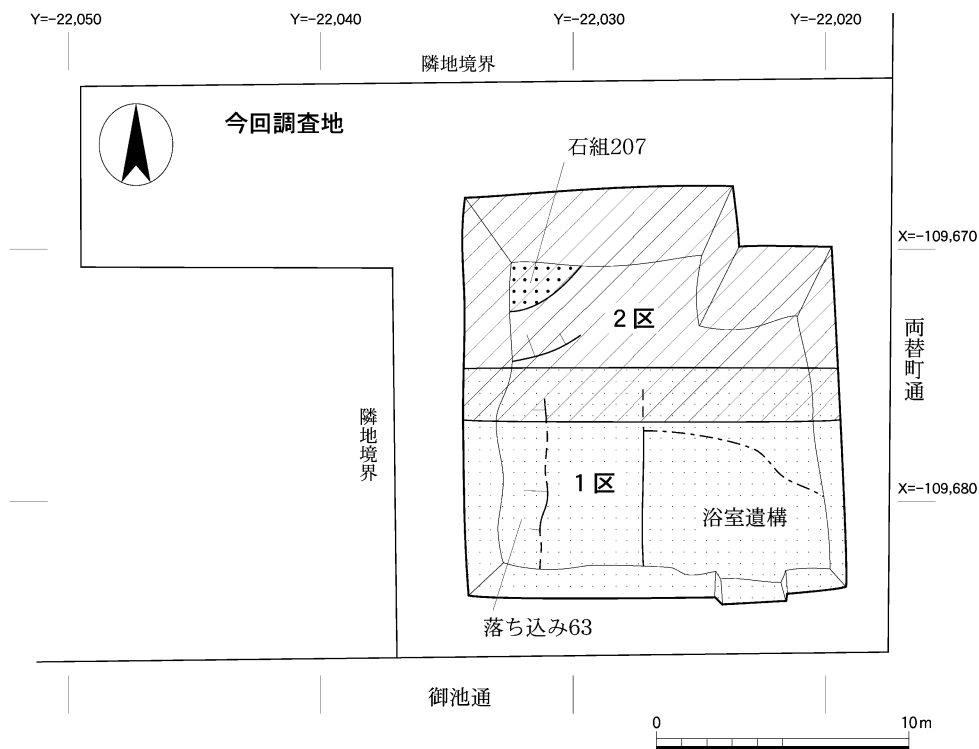


図3 調査区配置図（1：300）

と判断されたことから、3次元オルソ測量を行ったのち、シリコンで型取りして石材と構築土を取り上げて保管し、後の活用を図ることとなった。

## 2. 位置と環境

調査地は、鴨川によって形成された扇状地の比較的安定した基盤層上に立地している。この扇状地は平安京左京域では北北東から南南西の方向にのびる。扇状地上には点々と弥生時代頃の集落遺跡が分布しており、今回の調査地も弥生時代から古墳時代の集落である烏丸御池遺跡にあたる。この遺跡は、北は現在の押小路通付近から南は蛸薬師通付近まで約0.7 km、東は麩屋町通から西は西洞院通まで約1 kmの範囲にわたる。北は烏丸丸太町遺跡と、南は弥生時代の大集落跡烏丸綾小路遺跡と接している。過去の周辺調査では、京都市営地下鉄東西線の敷設に伴う調査で、弥生時代後期の竪穴住居が見つかった<sup>1)</sup>。

その後、平安京遷都に伴い、当町は平安京左京三条三坊十町に位置するようになる。平安時代前期の当町の利用についてはよくわかっていないが、平安時代中期には陽明門院禎子内親王の御所となった<sup>2)</sup>。この御所は、承暦四年（1080）に焼失する。その後、藤原家成、藤原範光邸を経て、鎌倉時代には後鳥羽上皇の御所となり、承元三年（1209）に上皇が渡御している。この御所は、押小路殿、三条坊門烏丸殿、押小路烏丸泉殿などと呼ばれた。承久の乱ののち、陰明門院藤原麗子の邸宅となり、貞応元年（1222）に焼失。正嘉元年（1257）には後嵯峨天皇が御所を造営した。弘長二年（1262）には、藤原成子の邸宅となる。13世紀末から14世紀初め頃に二条摂関家に譲

られたようで、それ以後、二条殿と呼ばれて代々二条家の邸宅として室町時代まで存続する。二条殿は「龍躍池」と呼ばれた泉と池を中心とする庭園で名を馳せ、洛中洛外図にもその様子が描かれている。二条殿は文明九年(1477)の放火により焼失。文明十八年(1486)には再建されるが、二条家の零落により、二条殿も荒廃していった。その後、二条殿の庭園を気に入った織田信長が京都における御座所にこの地を選び、二条家を報恩寺に移徙させて、天正四年(1576)から二条御新造(二条殿御池城)を造営した<sup>3)</sup>。信長は天正七年(1579)にこの二条御新造を誠仁親王に進上し、このことから御所の上御所に対して下御所あるいは二条新御所と呼ばれるようになる。天正十年(1582)の本能寺の変の際に信長の長子信忠はこの下御所で討ち死にし、下御所は焼失する。

近世になると、烏丸通と室町通の間に新道(両替町通)が開かれ、慶長十三年(1608)から両替町通の二条通と三条通の間に金座・銀座・朱座が相次いで設置された。<sup>4)</sup>

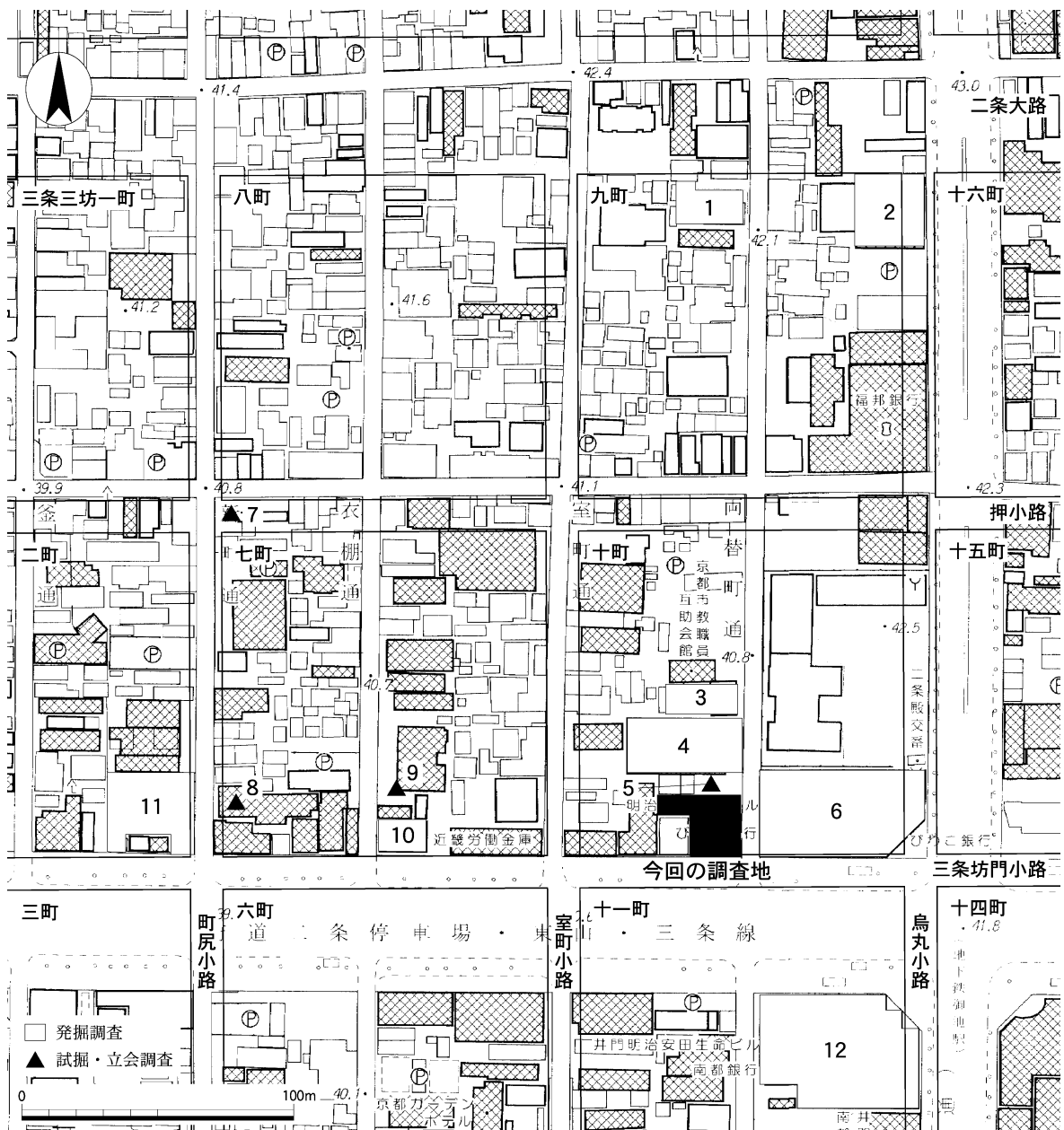


図4 調査地位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺調査概要表

No.	年度	遺跡名	調査法	主な遺構	文献
1	2006	左京三条三坊九町	発掘	平安時代前期の柱穴、室町時代の柵、桃山時代～江戸時代初期の堀状遺構・井戸・柵、江戸時代の井戸・路面・建物。	『平安京左京三条三坊九町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-15』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
2	1989	左京三条三坊九町	発掘	桃山時代～江戸時代前期の土壇・柱穴・井戸・溝・濠・柵列・石垣。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年
3	2007	左京三条三坊十町跡	発掘	平安時代後期～鎌倉時代の溝・石敷き・柱穴・集石、室町時代の土壇、江戸時代の井戸・土壇・溝。	『平安京左京三条三坊十町(押小路殿・二条殿)跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-8』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2007年
4	2001	左京三条三坊十町	発掘	平安時代～室町時代の井戸・建物・池・石・石垣・土壇・柱穴、桃山時代～江戸時代の石垣・井戸・土壇・柱穴、江戸時代後期の建物・柵・井戸・石室・土壇・柱穴。	『平安京左京三条三坊十町(押小路殿・二条殿)跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-7』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
5	2007	左京三条三坊十町	試掘	江戸時代の土壇、幕末の建物。	『京都市内遺跡試掘調査報告 平成19年度』京都市文化市民局 2008年
6	1966 1977 1980	左京三条三坊十町	発掘	平安時代後期の烏丸小路溝・井戸、鎌倉時代の烏丸小路西側溝・井戸、室町時代の溝・井戸・柱穴・土壇、江戸時代の石垣・池・井戸・石室・柱穴・土壇。	「押小路殿の研究」『平安文化の研究1』平安博物館研究紀要 第2輯 1971年、 『押小路殿跡 平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告 第12輯 (財)古代学協会 1984年
7	1997	左京三条三坊七町	立会	鎌倉時代～室町時代の落ち込み。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
8	1980	左京三条三坊七町	立会	平安時代後期の土壇、室町時代の木棺墓・土壇、江戸時代の土壇。	『京都市内遺跡試掘・立会調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財センター 1981年
9	1997	左京三条三坊七町	立会	平安時代後期の柱穴、鎌倉～江戸時代の池、江戸時代後期の土壇・溝。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成9年度』京都市文化市民局 1998年
10	1980	左京三条三坊七町	発掘	古墳時代の遺物包含層、平安時代後期の南北溝・柱穴、鎌倉時代～室町時代の土壇。	『平安京左京三条三坊 京都労働金庫建設予定地における発掘調査の概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981年
11	2009	左京三条三坊二町	発掘	平安時代の井戸・土壇・柱穴、室町時代後半の堀・土壇、桃山時代～江戸時代の井戸。	『平安京左京三条三坊二町・烏丸御池遺跡』古代文化調査会 2009年
12	1983 1984	左京三条三坊十一町	発掘	平安時代中期の烏丸小路西側溝・井戸、鎌倉時代の土壇、室町時代の井戸・土壇墓・火葬墓、江戸時代前期の溝・井戸。	『平安京左京三条三坊十一町』平安京跡研究調査報告 第14輯 (財)古代学協会 1984年

過去の周辺調査では、上記の歴史を反映し、豊富な遺構遺物が発見されている(図4、表1)。特に今回の調査区の北側で2001年度に実施された調査(図4-4)では、鎌倉時代から室町時代まで形を変えながら存続する庭園遺構が見つかった。あわせて庭園に伴う可能性のある建物も見付き、それまで文献や絵画資料には記されるものの、考古学的には明らかにならなかった二条殿の庭園の実態を知る資料として注目された。また、調査地の東隣で実施された調査(図4-6)でも、平安時代後期から江戸時代までの各時期の遺構が見つかった。

## 註

- 1) 「平安京左京三条四坊」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 2) 当町の邸宅の変遷については以下の資料をもとにした。山田邦一「左京全町の概要」『平安京提要』角川書店 1994年、小川剛生「第7章押小路烏丸殿」『二条良基研究』笠間書院 2005年
- 3) 川上 貢「撰関家二条家の押小路殿と報恩寺屋敷」『京都府埋蔵文化財論集第4集』2001年
- 4) 「竜池学区」『史料京都の歴史9 中京区』平凡社 1985年



### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序 (図5・6)

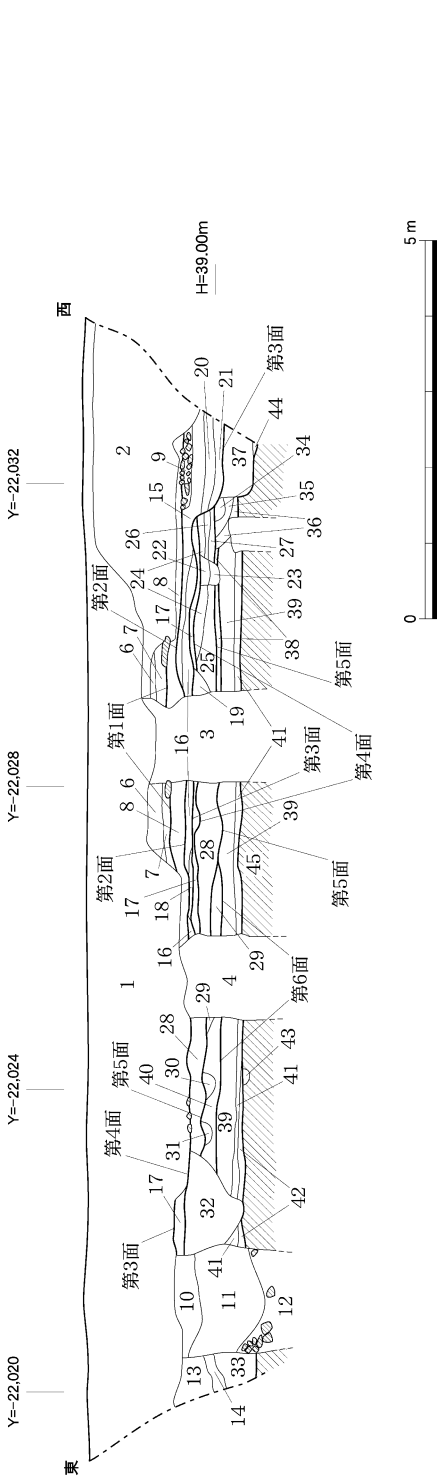
調査地は現状では現代盛土のためほぼ平坦となっており、標高は40.6～40.8mである。

1区では、G.L - 1.0～1.3mまで現代盛土と幕末から近代の整地層が堆積し、これを除去すると江戸時代中期の遺構面(第1面)となる。検出面の標高は39.6m前後で、ほぼ平坦である。約0.2m掘り下げると、江戸時代前期の遺構面(第2面)となる。江戸時代の整地層は、黒褐色シルト～細砂層と洪水砂と考えられる砂質中～粗砂層が互層になって堆積する。これらを掘り下げると安土桃山時代の遺構面(第3面)となる。この面は、褐灰色粘質シルト～極細砂の整地層上面で成立し、部分的に土間と想定できる灰と炭を含み固く締まる黒褐色シルト～極細砂の三和土が認められる。室町時代後期の遺構面(第4面)は、灰黄褐色シルト～細砂と黄褐色粘質シルトの整地層の上面で検出した。この整地土は北側では約0.05mであるが、南側では約0.3mと厚い。これは基盤層が北側で高く、南側で低いことに起因しており、この時期の整地により、調査地全体がほぼ平坦になる。鎌倉時代から室町時代前期の遺構面(第5面)は、灰黄褐色極細砂と遺物を多量に含む黒褐色シルト～細砂の整地層上面で検出した。この整地層は調査区南半にのみ約0.1～0.2m堆積する。この層を除去すると、にぶい黄褐色シルトの基盤層である無遺物層となる。基盤層上面の標高は調査区北東で39.3m、調査区南西で38.7mあり、北東から南西に傾斜している。平安時代の遺構はこの基盤層上面で検出した(第6面)。なお、この基盤層を削平する砂礫層が調査区北東から南西にかけて認められた。遺物を含まないが、縄文時代以前の流路の可能性はある。

2区では、G.L - 1.7～1.8mまで現代盛土と幕末から近代の整地層が堆積し、これを除去すると、江戸時代の整地面となる(第1面)。この整地面を構成する整地層は黒褐色シルト～細砂、灰黄褐色粘質シルト～細砂からなり、部分的に洪水砂と考えられる中～粗砂が帯状に認められるが、

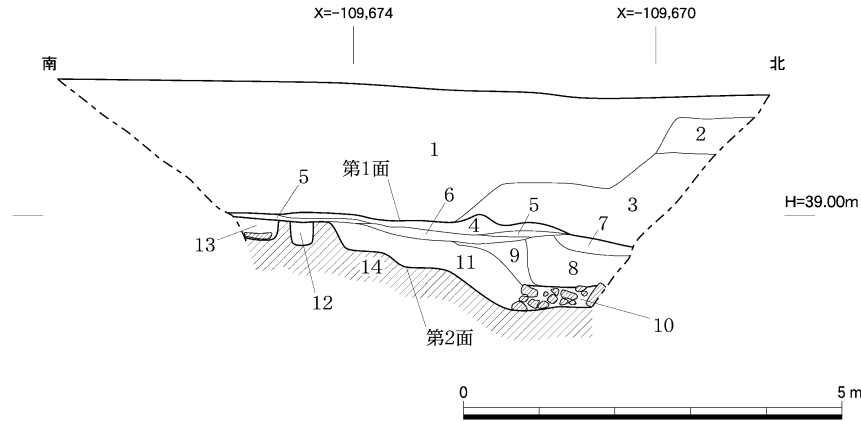
表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代	土坑177・225、溝114・120・163、落ち込み118	
鎌倉時代～ 室町時代前期	土坑110、溝156、落ち込み151	
室町時代後期	堀160、溝92・93、瓦敷き遺構、落ち込み63	
安土桃山時代	竈57・66、井戸153、土間、落ち込み63、石組207、土坑210	
江戸時代前期	土坑50・74・81・83、炉1、溝49	
江戸時代中期 ～後期	土坑17・31・199・201・202、井戸15、石室10	



- |   |   |
|---|---|
| <p>1 現代盛土</p> <p>2 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂、礫混じる、焼瓦詰まる（葺未整地層）</p> <p>3 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂、漆喰・焼瓦詰まる（江戸後期井戸）</p> <p>4 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂、φ1～20cmの礫・漆喰・焼土多量に含む（江戸後期井戸）</p> <p>5 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、焼瓦・漆喰多量に含む（江戸後期井戸）</p> <p>6 10YR5/2 灰黄褐色年質シルト、φ1～5cmの礫・炭少量含む（江戸中期整地層）</p> <p>7 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、φ1～3cmの礫・炭少量含む、5Y5/3 灰オリーブ色シルトブロック少量混じる（江戸中期整地層）</p> <p>8 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂、φ1～3cmの礫多量に含む、5Y5/3 灰オリーブ色シルトブロック多量に混じる（江戸中期整地層）</p> <p>9 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、φ1～3cmの礫詰まる、炭少量含む（土坑50）</p> <p>10 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、φ1～10cmの礫多量、炭少量含む（江戸前期井戸）</p> <p>11 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂、φ1～5cmの礫含む、黄色シルトブロック少量混じる（江戸前期井戸）</p> <p>12 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂、φ5～20cmの礫多量・炭少量含む（江戸前期井戸）</p> <p>13 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂、粗砂～小礫混じる、φ1～20cmの礫少量含む（江戸土坑）</p> <p>14 10YR4/2 灰黄褐色極細砂～中砂、やや粘質、φ1～30cmの礫少量含む（堀160）</p> <p>15 2.5Y3/2 黒褐色シルト～細砂、φ1～3cmの礫多量に含む、2.5Y6/2 灰黄褐色極細砂ブロック混じる（江戸前期整地層）</p> <p>16 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂、炭少量含む（安土桃山整地層）</p> <p>17 10YR4/1 褐灰色粘質シルト～細砂、炭少量含む（土間）</p> <p>18 10YR3/1 黒褐色シルト～極細砂、炭少量含む、固く締まる（土間）</p> <p>19 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、黄色シルトブロック多量に混じる</p> <p>20 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、φ1～3cmの礫少量含む（落ち込み63埋土）</p> <p>21 10YR4/1 褐灰色粘質シルト～細砂、φ1～3cmの礫微量、炭少量含む、5Y5/4 オリーブ色シルト～極細砂ブロック多量に混じる（落ち込み63埋土）</p> <p>22 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗砂混じる、やや粘質（溝93）</p> <p>23 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる</p> | <p>24 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、10YR7/4 にぶい黄褐色シルトブロック混じる（室町整地層）</p> <p>25 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト、極粗砂～小礫混じる（室町整地層）</p> <p>26 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂、小礫含む</p> <p>27 10YR5/4 極細砂～細砂、やや砂質</p> <p>28 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、（落ち込み151）</p> <p>29 10YR4/2 灰黄褐色極細砂、φ1～3cmの礫微量を含む</p> <p>30 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～細砂、炭少量含む</p> <p>31 10YR4/1 褐灰色細～中砂、極粗砂～小礫混じる、炭少量含む</p> <p>32 10YR4/2 褐灰色極細砂～中砂、やや砂質、φ1～10cmの礫少量含む（堀160）</p> <p>33 10YR5/3 にぶい黄褐色中～極粗砂、φ1～3cmの礫少量含む</p> <p>34 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗砂混じる、10YR6/4 にぶい黄褐色粘質シルトブロック混じる</p> <p>35 2.5Y4/2 暗黄褐色シルト～細砂、粗砂混じる、炭少量含む</p> <p>36 2.5Y7/2 灰黄褐色極細砂ブロック混じる</p> <p>37 10YR3/1 黒褐色シルト、やや粘質、φ1～3cmの礫少量、土器・炭多量を含む（鎌倉整地層）</p> <p>38 10YR2/1 黒色粘質シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、土器・炭多量を含む（溝120）</p> <p>39 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、土器・炭多量を含む（鎌倉整地層）</p> <p>40 10YR2/1 黒色シルト～細砂、やや粘質、粗～極粗砂混じる、φ1～10cmの礫・土器少量、炭多量を含む（溝120）</p> <p>41 10YR3/1 黒褐色細～中砂、φ1～3cmの礫・炭少量含む（溝120）</p> <p>42 10YR2/2 黒褐色粘質シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、土器・炭多量を含む</p> <p>43 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト、土器・炭多量を含む（落ち込み118）</p> <p>44 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（基盤層）</p> |
|---|---|

図5 1区地層断面図(1:100)



- 1 現代盛土
- 2 10YR2/2 黒褐色シルト～細砂、礫混じる、焼土焼瓦詰まる（幕末整地層）
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色中～極粗砂、砂質、φ1～5cmの礫多量に含む（洪水砂処理土坑か）
- 4 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト～細砂、粗砂混じる、炭少量含む（江戸整地層）
- 5 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、φ1～3cmの礫・炭少量含む（江戸整地層）
- 6 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト、中～粗砂帯状に入る（江戸整地層）
- 7 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、小礫混じる、やや粘質、炭多く含む
- 8 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、φ5～10cmの礫少量、炭多量に含む
- 9 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、φ1～5cmの礫少量含む
- 10 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、粘質、φ3～15cmの礫多量、炭少量含む
- 11 10YR5/2 灰黄褐色中～極粗砂、砂質、φ1～5cmの礫・炭少量含む、シルトブロック混じる
- 12 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、炭多量に含む、粘質シルトブロック少量混じる
- 13 10YR3/3 暗褐色シルト～細砂、粗砂～小礫混じる、φ1～20cmの礫・炭少量含む
- 14 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（基盤層）

図6 2区西壁断面図（1：100）

江戸時代中期以降の大土坑や井戸が調査区の大半を占めるため、この整地層は調査区西端にわずかに残るのみであった。江戸時代の整地層を除去すると、黄褐色シルトの基盤層となる。安土桃山時代以前の遺構は、この基盤層上面で検出した（第2面）。基盤層上面の標高は、北東部で39.2m前後、南西部で39.0m前後ある。

## （2）1区第1面の遺構 江戸時代中期以降（図7、図版1-1）

第1面で検出した主な遺構には、井戸15、石室10、土坑17・31がある。他に井戸を多数検出したが、全て埋土に漆喰や焼瓦を含み、江戸時代後期以降に埋まったものと考えられる。多くがY=-22,025からY=-22,028ラインの間に南北に分布する。これは現在の両替町通から約10mの位置にあたることから、両替町通に間口を開く町屋の井戸と考えられる。

井戸15 調査区中央部で検出した。チャートの切り石を積み上げた井戸である。掘形の直径は約1.9m、井戸枠の直径は検出部で約1.5m、底部付近で約1mある。井戸底の標高は37.2mである。他の井戸と同様に埋土に漆喰や焼け瓦を多く含み、江戸時代後期の井戸と考えられる。

石室10（図版2-1） 調査区北東隅で検出した。北側は削平を受け、南北1.3m、東西3m分を検出した。径20～30cmの砂岩やチャートの石を内側に面を揃えて並べ、径3～15cm程度の石を裏込めとして用いる。底は固く土間状に締まる。検出面からの深さは0.6mある。埋土には棧瓦や焼土が混じる。

土坑17 調査区東側で検出した。径0.5～0.6mの不整形円で、深さは約0.1mと浅いが、17

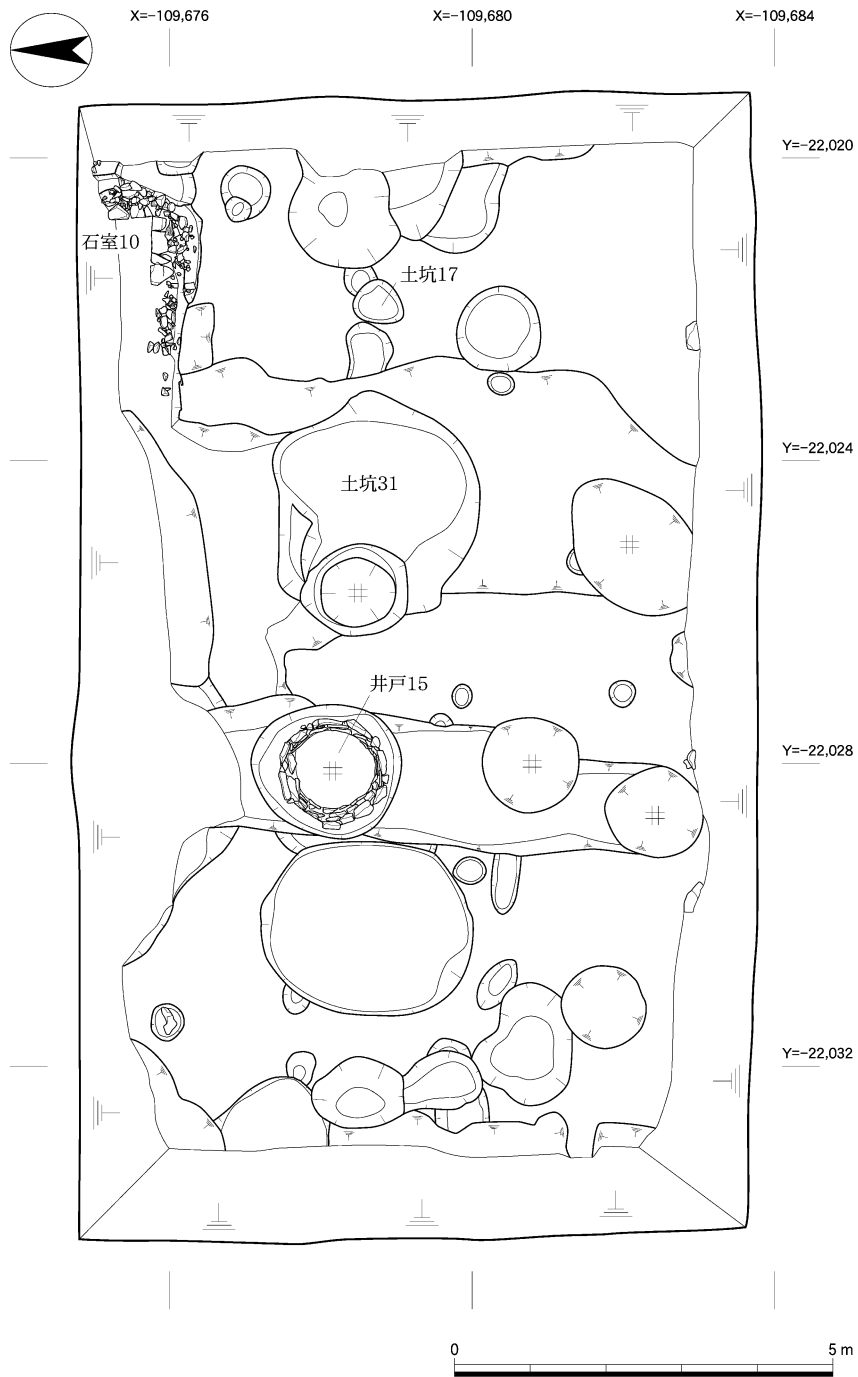


图7 1区第1面平面图 (1:100)

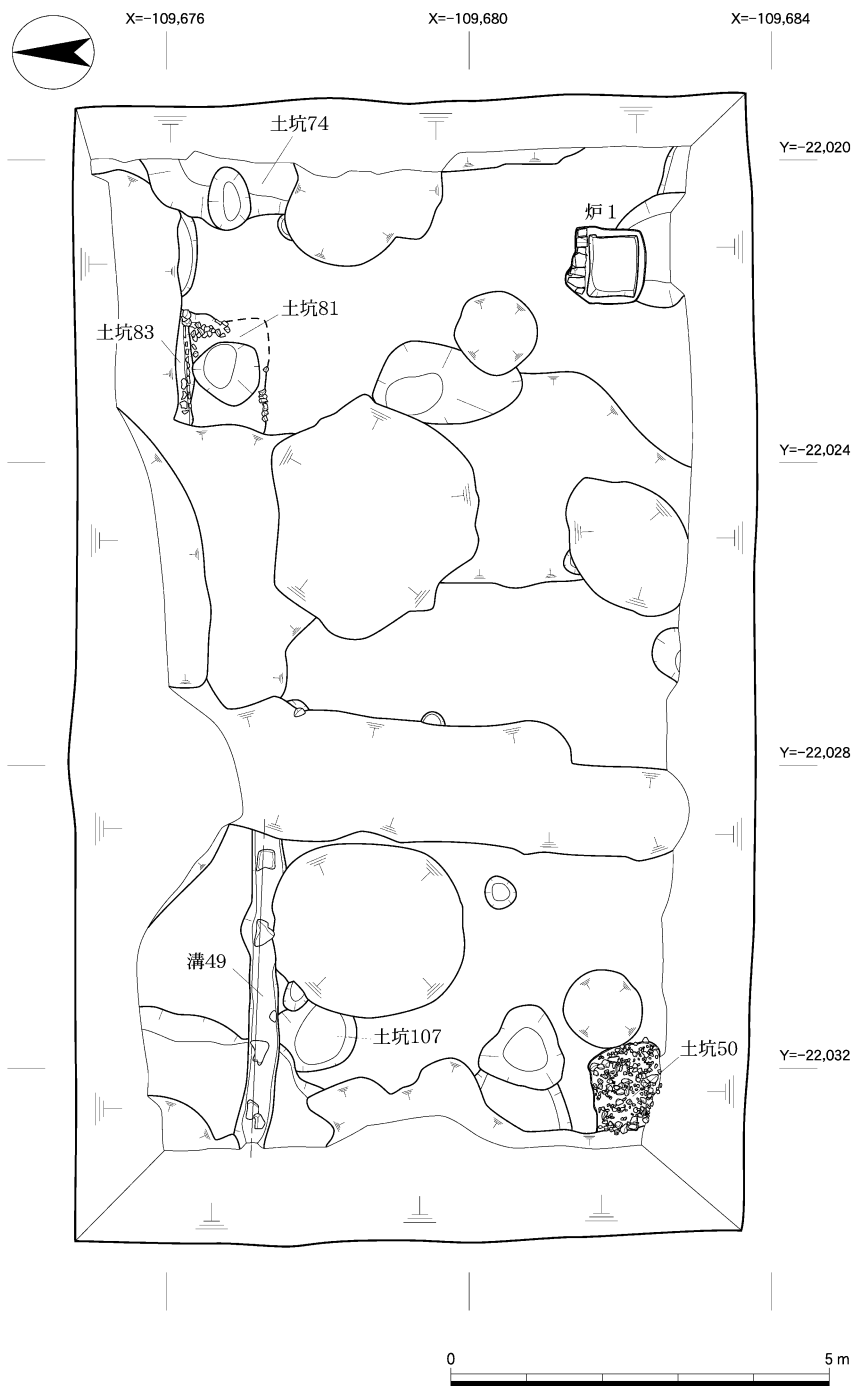


图8 1区第2面平面图 (1:100)

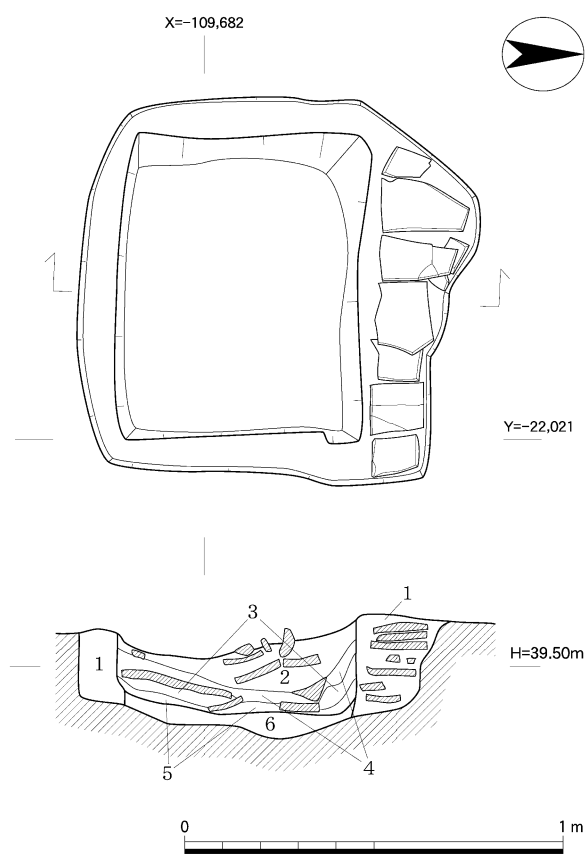
世紀後葉から18世紀前葉の遺物がまとまって出土した。埋土は2.5Y3/2黒褐色細砂～粗砂である。

土坑 31 調査区東側で検出した。南北約2.5 m、東西約3 mの不定形な土坑で、深さは検出面から約1.5 mある。埋土には焼瓦や焼土が詰まる。壁が抉られるように掘られている箇所があり、土取りののち廃棄物処理のために利用された土坑と考えられる。

### (3) 1区第2面の遺構 江戸時代前期 (図8、図版1-2)

第2面で検出した主な遺構には、炉1、土坑50・74・81・83・107、溝49がある。

炉1 (図9、図版2-2) 調査区南東で検出した。掘形の平面形は、南北約1.0 m、東西約1.0 mの不整形な方形で、検出面からの深さは約0.25 mある。白色粘土で固めて壁を構築している。粘土の厚みは南・東・西壁で約0.1 mだが、北壁は約0.2 mあり、さらに北壁のみ割った平瓦を積み重ね補強材としている。底には約0.05 mの厚さの床土 (図9-6層) を入れ、その上に約0.1 mの炭層 (図9-3・4・5層) が堆積する。白色粘土の壁土は直接火を受けた痕跡が認められなかったため、この炭層を火床としたと考えられる。炭の樹種はヒノキと二葉マツであった。埋土にも灰や焼土が多量に混じる。17世紀中葉の遺物が出土している。



- 1 10YR6/6 明黄褐色粘質粘土、0.5cm以下の礫微量、焼土少量混じる
- 2 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂、炭・瓦・焼土多量に混じる
- 3 炭層
- 4 炭層、2.5Y5/3 黄褐色粘土少量混じる
- 5 炭層、瓦多量に混じる
- 6 2.5Y3/2 黒褐色細砂～中砂、土器多量、炭少量混じる

図9 炉1実測図 (1:20)

土坑 50 (図版2-4) 調査区南西隅で検出した。平面形はいびつな方形で、南北約0.9 m、東西約1.2 m分を調査区内では検出した。深さは約0.1 mあり、径3～15 cmの石が詰まる。埋土は2.5YR3/2黒褐色中～粗砂混じりシルト～極細砂である。

土坑 74 調査区北東で検出した。調査区内では南北約2 m、東西約1 m分を検出した。深さは約0.3 mあり、中央部はさらに深く0.55 mある。埋土は10YR4/2灰黄褐色シルト～細砂で炭化物がやや多く混じる。17世紀第1四半期の遺物がまとまって出土した。土器・陶磁器類とともに多量の鉄滓や銅滓、鞆の羽口片が出土しており、両替町に関連する廃棄物処理土坑の可能性はある。

土坑 81 調査区北東で検出した。北側は土坑 83 に削平を受ける。掘形の平面形は方形で、検出長は、南北約

1 m、東西約 1.5 m である。検出面からの深さは約 0.05 m あり、黄白色粘土を入れ、縁に径 3～10 cm の石を並べる。中央部は径 0.8 m の円形に凹む。

土坑 83 調査区北東で検出した。北側と西側は削平を受け、全体の規模は不明である。検出長は南北約 0.2 m、東西約 1.5 m である。検出面からの深さは約 0.1 m で、壁に瓦を貼り付ける。底には径 5～10 cm の石を並べる。

土坑 107 調査区北西で検出した。径約 1.0 m の円形で、深さは約 0.35 m ある。断面形は播鉢状を呈する。埋土から多量の炭化物と炉壁と考えられる焼けた粘土塊が出土した。

溝 49 (図版 2-3) 調査区北西で検出した布掘り溝である。検出長は東西約 4.0 m、幅約 0.4 m、深さは約 0.25 m ある。壁はほぼ垂直に落ち、断面形は方形を呈する。底には扁平な根石が東から 1 m、1.5 m、1 m の間隔で据えられていた。塀の基礎である可能性が考えられる。

#### (4) 1 区第 3 面の遺構 安土桃山時代 (図 10、図版 3-1)

第 3 面で検出した主な遺構には、竈 57・66、井戸 153、土間、落ち込み 63 がある。このうち竈 2 基と井戸、土間は浴室遺構を形成する遺構と考える。その根拠については 5 章のまとめで詳述する。

竈 57 (図 11～13、図版 3-2・4) 調査地南東で検出した大型の竈である。焚口を北に向けて竈 66 と並列する。土間から一段掘り下げる半地下式である。燃烧部は馬蹄形を呈し、規模は東西 1.1 m、南北 1.7 m、深さは 0.5 m ある。燃烧部内には、鉄釜を支えるためと考えられる径 20～30 cm の花崗岩が壁に沿って据えられていた。これらの花崗岩は強く火を受けており、西側列のものは崩れて砂状になっていた。この花崗岩の裏込めには径 3～10 cm 程度の河原石を用いている。燃烧部奥の底には径 5～15 cm の扁平な石が敷かれていた。また、燃烧部の底には厚さ 3～8 cm の炭化物の堆積 (以下炭層) が認められた (図 12-5 層)。底に敷かれた扁平な石はこの炭層に覆われており、直接火を受けた痕跡が認められなかったことから、この炭層を火床として用いたものと考えられる。炭化物の樹種は広葉樹 (散孔材) と樹皮が認められた。焚口部は幅約 0.8 m あるが、西に広がり燃烧部との間に幅約 0.5 m の垂直に立ち上がる壁をつくる。この西拡張部には北に伸びる溝が取り付く。この溝は幅 0.35～0.4 m で、深さは 5～10 cm あり、南から北に傾斜する。この溝も炭化物で埋まる。また燃烧部と焚口部の境に木杭の痕跡が東西に 3 基並んで見つかった。西側 2 基の杭穴が接する壁は炭化物が付着せず、火を受けた痕跡が認められないことから、板状のものが当たっていたと考えられ、木杭は板を留めるためのものであったと推測される。この竈の埋土には径 3～20 cm 程度の焼石が詰まっていた (図 12-3 層)。この焼石は全面が強い火を受け、赤変して炭化物が付着していた。

また、この竈の周囲には、東西約 1.5 m、南北約 1.8 m の範囲に方形に礎石が据えられ、礎石と礎石の間には径 3～10 cm 程度の河原石が敷かれていた。礎石と考えられるものは 12 基ある。石材は、白色の斑をもつ火成岩が 1 石、砂岩が 2 石、9 石が花崗岩である。柱の並びは、東側、西側ともに 2 列ずつ認められる。竈 57 の東側の柱列、西側の柱列ともに、竈 57 から見て内側の礎

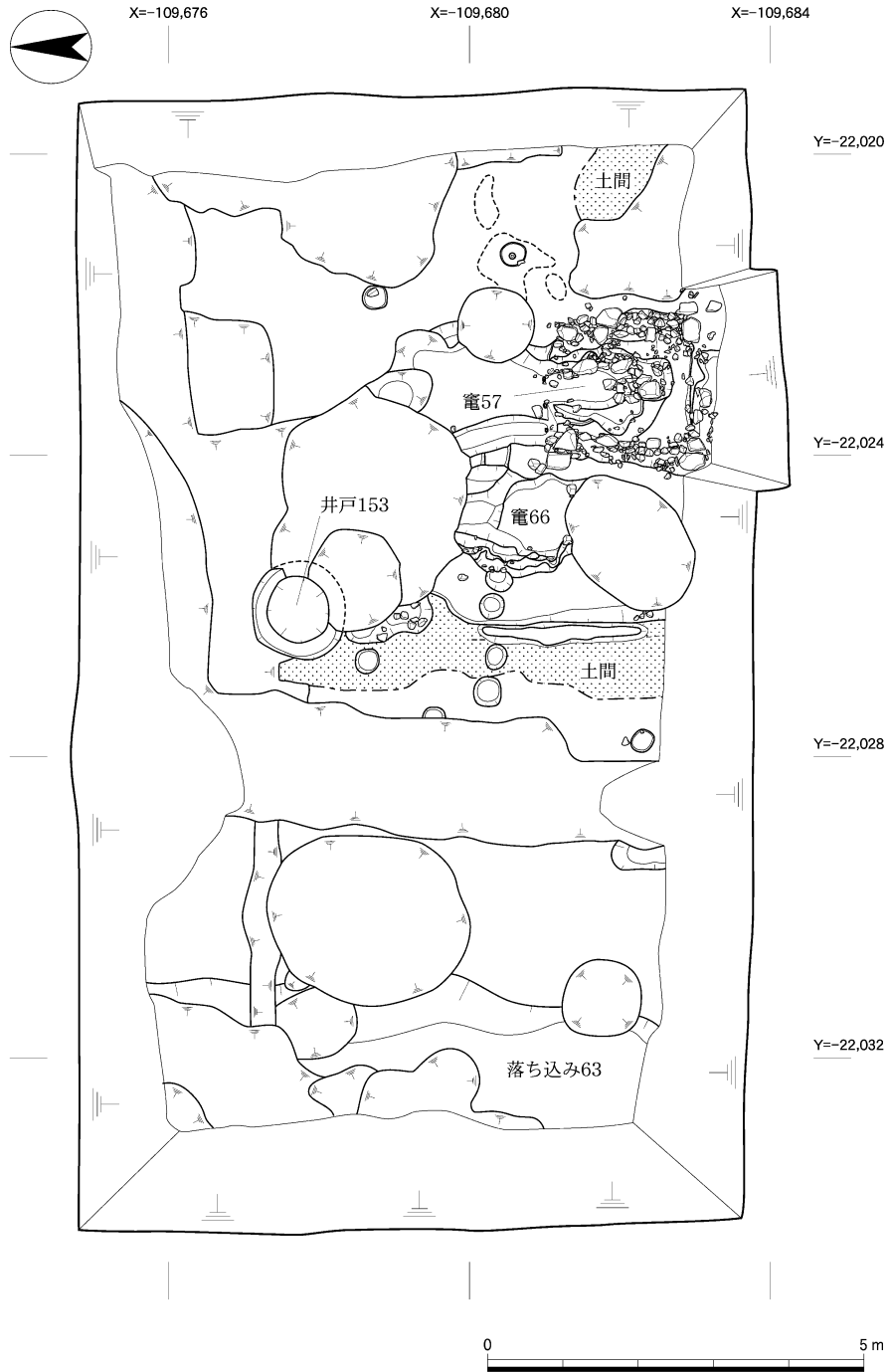


図10 1区第3面平面図 (1:100)



Y=-22,028

Y=-22,024

Y=-22,020

X=-109,682

X=-109,678

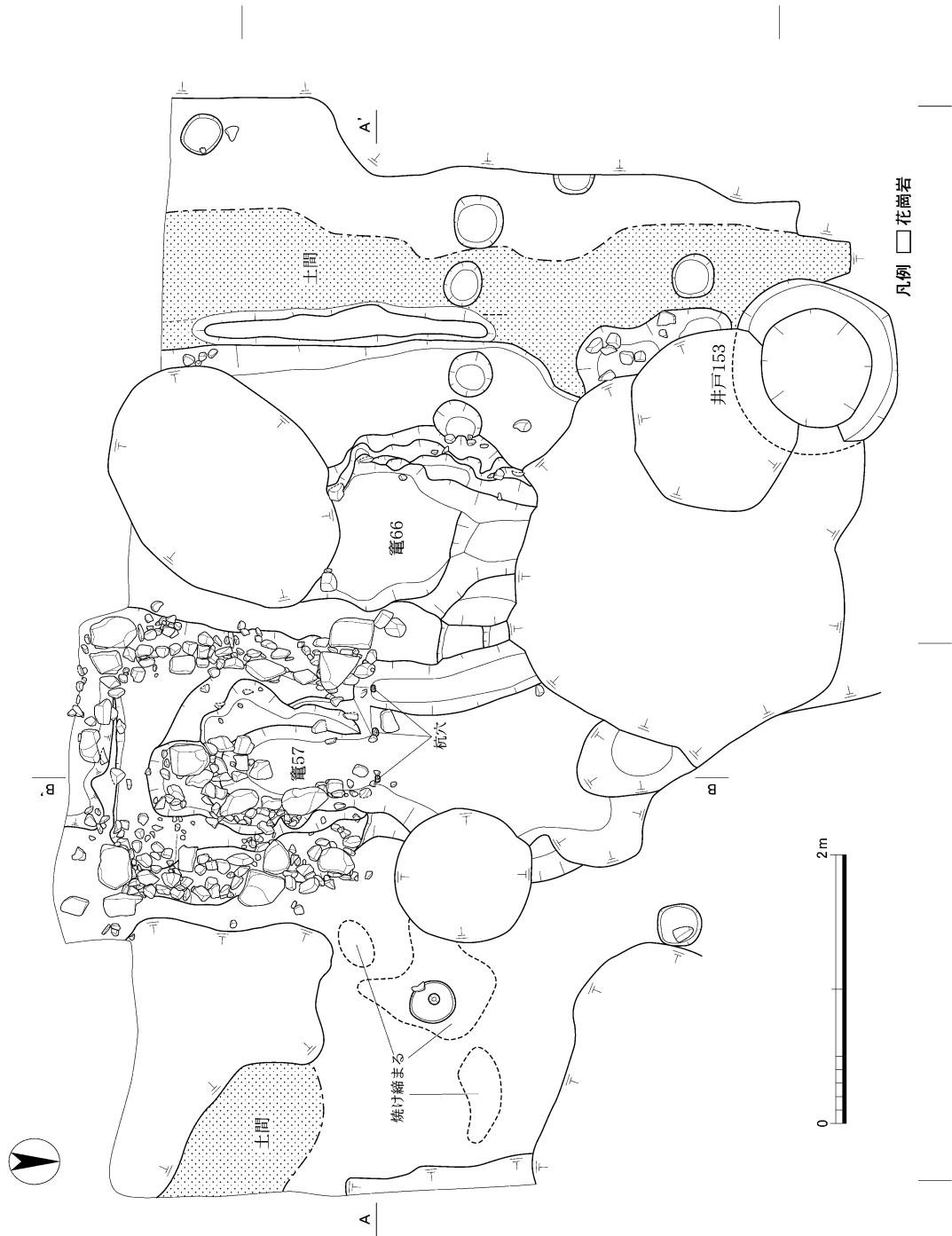
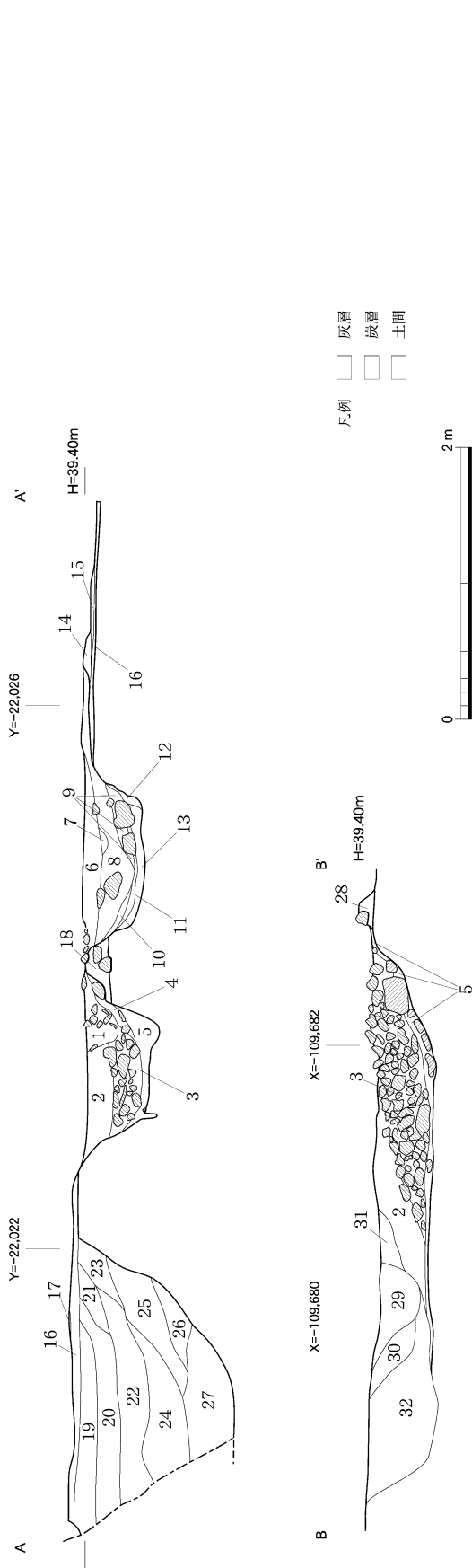


図11 浴室遺構平面図 (1 : 50)



- |   |  |  |
|---|--|--|
| <p>1 2.5Y3/2 黒褐色シルト～極細砂、中～粗砂混じり、φ3～7cmの焼石多量、炭・焼土少量含む、締まり悪い</p> <p>2 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト～極細砂、粗～極粗砂混じり、φ3～10cmの礫少量、炭微量含む、固く締まる</p> <p>3 10YR3/2 黒褐色、φ3～20cmの焼石詰まる、炭・焼土多量に含む、締まり非常に悪い</p> <p>4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細砂や粘質、φ10cmの礫微量、炭・焼土少量含む</p> <p>5 炭 (竈57灰床か)</p> <p>6 2.5Y3/2 黒褐色極細～細砂、粗～極粗砂混じり、砂質細砂ブロック混じる、φ1～5cmの礫少量、炭少量含む</p> <p>7 10YR4/2 灰黄褐色極細～細砂、粗～極粗砂混じり、黄褐色シルトブロック混じる、炭少量含む</p> <p>8 10YR4/4 褐色粘質シルト、極粗砂～小礫混じり、φ3～20cmの礫少量、炭・焼土少量含む、固く締まる</p> <p>9 7.5YR3/3 褐色粘質シルト、φ10～20cmの礫多量、焼土・灰多量に含む</p> <p>10 10YR3/2 黒褐色粘質シルト、炭多量、焼土少量含む</p> <p>11 10YR6/1 褐色灰、炭・焼土少量含む</p> <p>12 10YR4/2 灰黄褐色シルト、粗砂混じり、炭多量、焼土少量含む</p> <p>13 炭 (竈66灰床か)</p> <p>14 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、粗砂混じり、炭少量含む</p> <p>15 10YR3/1 黒褐色シルト～極細砂、灰・炭多量に含む、固く締まる (土間)</p> <p>16 2.5Y5/4 黄褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じり、2.5Y6/3 にぶい黄色シルトブロック、φ1～3cmの礫少量、炭・焼土少量含む、非常に固く締まる (安土桃山整地層)</p> <p>17 5YR4/4 にぶい赤褐色シルト、灰・焼土多量に含む</p> <p>18 10YR4/4 褐色シルト、小礫混じる、非常に固く締まる (竈構築土か)</p> | <p>凡例 □ 灰層 □ 炭層 □ 土間</p> <p>竈57 埋土</p> <p>竈66 埋土</p> | <p>19 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト～極細砂、極粗砂～小礫混じり、φ1～5cmの礫少量含む、固く締まる</p> <p>20 10YR3/2 黒褐色極細～中砂、極粗砂～小礫混じり、φ1～10cmの礫少量、炭少量含む</p> <p>21 10YR4/2 灰黄褐色極細～中砂、粗～極粗砂混じり、炭少量含む</p> <p>22 10YR4/3 にぶい黄褐色極細～中砂、極粗砂～小礫混じり、φ1～10cmの礫少量、炭微量含む</p> <p>23 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂、極粗砂～小礫混じり、炭少量含む、固く締まる</p> <p>24 10YR4/2 灰黄褐色細～中砂や粘質、極粗砂～小礫混じり、φ1～10cmの礫少量含む</p> <p>25 10YR5/4 黄褐色シルトブロック、φ1～10cmの礫少量含む</p> <p>26 10YR3/2 黒褐色シルト～細砂や粘質、粗～極粗砂混じり、φ3～10cmの礫少量含む</p> <p>27 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂や粘質、炭少量含む</p> <p>28 10YR4/4 褐色粘質シルト、炭微量含む (竈構築土か)</p> <p>29 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト～極細砂、φ7～20cmの礫多量、炭・焼土多量に含む</p> <p>30 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質粘土～シルト、2.5Y6/4 粘土ブロック多量、φ10～15cmの礫少量含む</p> <p>31 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質粘土～シルト</p> <p>32 10YR4/4 褐色粘質シルト～細砂、φ5～15cmの礫少量、炭・鉄分多量に含む</p> |
|---|--|--|

図 12 竈 57・66、土間、堀 160 断面図 (1 : 50)

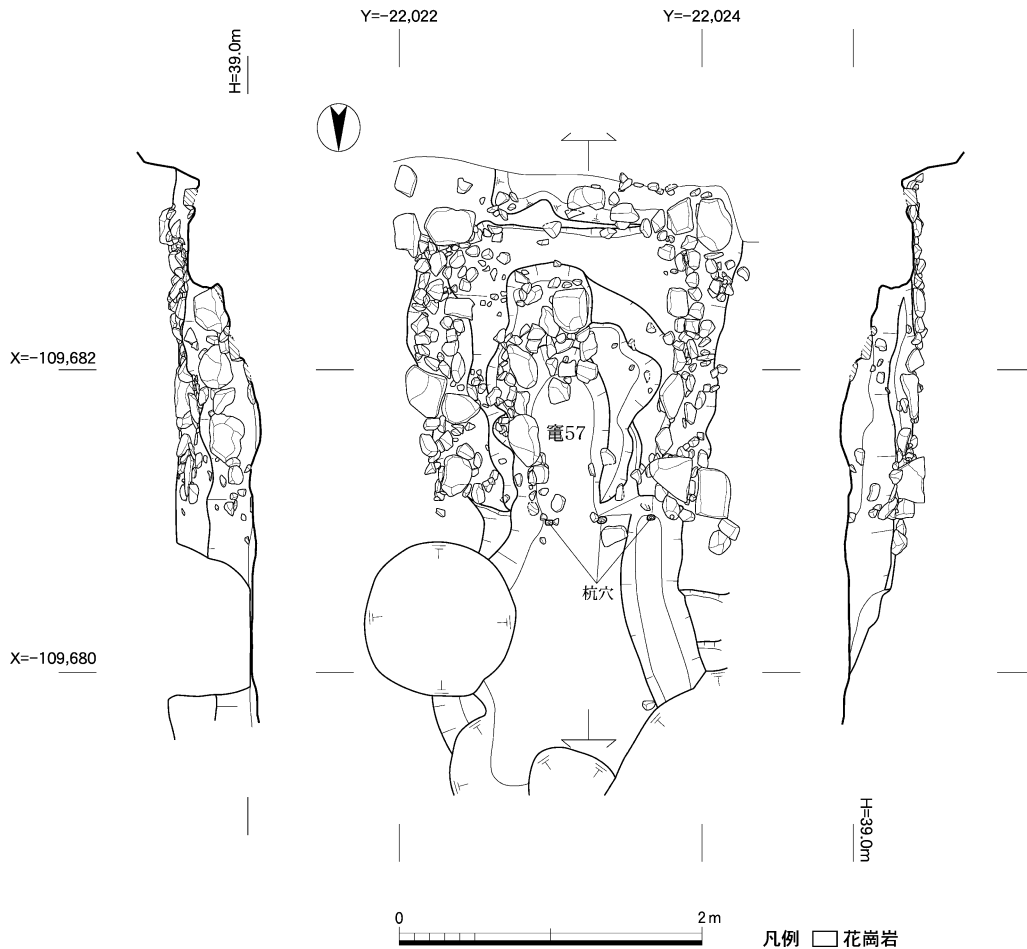


図13 竈57平・立面図（1：50）

石列と外側の礎石列。東側の列では、竈57から見て内側の礎石列が外側より約10cm一段低くなっている。また東側の外側礎石列の礎石下では、花崗岩製の五輪塔の地輪が平坦面を上に向けて据えられていたことから、修築の可能性が考えられる。これらの礎石と礎石間に敷かれた石は火を受けた痕跡は認められない。

この竈57と下述する竈66の東側と西側は、灰と炭混じりで非常に固く締まる土間となっていた。この土間は、竈66西側では南北約5.0m、東西約1.0mの範囲で検出した。竈57東側では南北約1.2m、東西約1.0mの範囲を検出した。さらに竈57東側の土間の北では土が焼け締まり、赤変する箇所が3ヶ所認められた。

竈66（図11・12、図版3-2）竈57の西で検出した。南側は江戸時代の井戸に削平され、本来の規模は不明であるが、現存で燃焼部は東西1.1m、南北0.8m、深さ0.4mある。土間から一段掘り下げる半地下式である。竈57と同様に底には火床としたと考えられる炭化物が約3～6cm堆積していた（図12-13層）。炭化物の樹種は広葉樹（散孔材）である。炭層の上には約2～5cmの灰が堆積する（図12-11層）。灰は大半がススキ属からなり、若干のイネが混じる。燃焼部の残存する南端の両壁際には径約15cmの花崗岩が1石ずつ据えられていた。燃焼部中央付近でも壁のラインに乱れがあり、浅く凹む箇所が認められることから、竈57と同様に壁際に釜を支

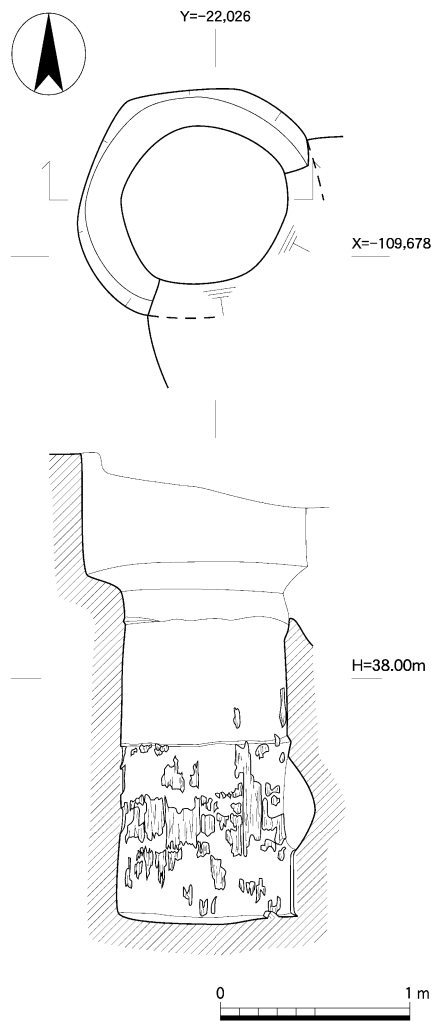


図14 井戸153実測図(1:40)

えるために据えられていた石が抜かれた可能性が考えられる。埋土からは、鉄釜の破片と思われるもの(図版13-金5・6)が出土している。

井戸153(図14、図版3-3)調査区中央北側で検出した平面円形の井戸である。検出面から深さ約0.7 mのところまで径が小さくなり2段構造を呈する。上段の直径は約1.3 m、下段の直径は約0.85 mで、深さは約2.5 mある。井戸底の標高は36.7 mである。下段は縦板を桶状に組んだものを2段に積んで井戸枠としていた。掘形と縦板との間に隙間はほとんどなく、掘形に直接縦板をはめ込んだようである。板の材質は針葉樹である。10YR2/3 黒褐色の小礫混シルト～細砂の炭化物を多量に含む土で埋められていた。埋土からは17世紀初頭の遺物が出土した。

落ち込み63(図版3-2)調査区西端で検出した。西に傾斜する落ち込みで、南北6.5 mに渡って検出した深さは最も深い箇所まで約0.3 mある。この落ち込みは鎌倉時代から認められ、その底を一部埋めるなどしながら踏襲したものと考えられる。

#### (5) 1区第4面の遺構 室町時代後期(図15、図版5-1・5-2)

第4面で検出した主要な遺構には、溝92・93、落ち込み63がある。また、第5面で掘削した堀160は、本来この面で検出すべき遺構であるため、ここで報告する。

溝92 調査区北西で検出した南北方向の溝である。検出長は1.4 m、幅0.2 m、深さは0.05 mある。底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。底の標高は39.37 mで、南北間で傾斜はほとんどない。埋土は2.5Y5/1 黄灰色の均質なシルト層で、14世紀後半から15世紀前半と考えられる土師器小片や瓦片が出土している。

溝93 調査区南西で検出した南北方向の溝である。検出長は2.0 m、幅0.4 m、深さは0.07～0.09 mある。底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。底の標高は39.11～39.17 mで南がやや低くなる。埋土は10YR4/2 灰黄褐色のシルト層で、14世紀後半から15世紀前半と考えられる土師器片が出土している。溝の東側では平瓦が敷かれたような状況で出土した。

落ち込み63 調査区西端で検出した。鎌倉時代から安土桃山時代まで踏襲される落ち込みで、この時期では、最も深い箇所まで平坦面から0.35 mある。

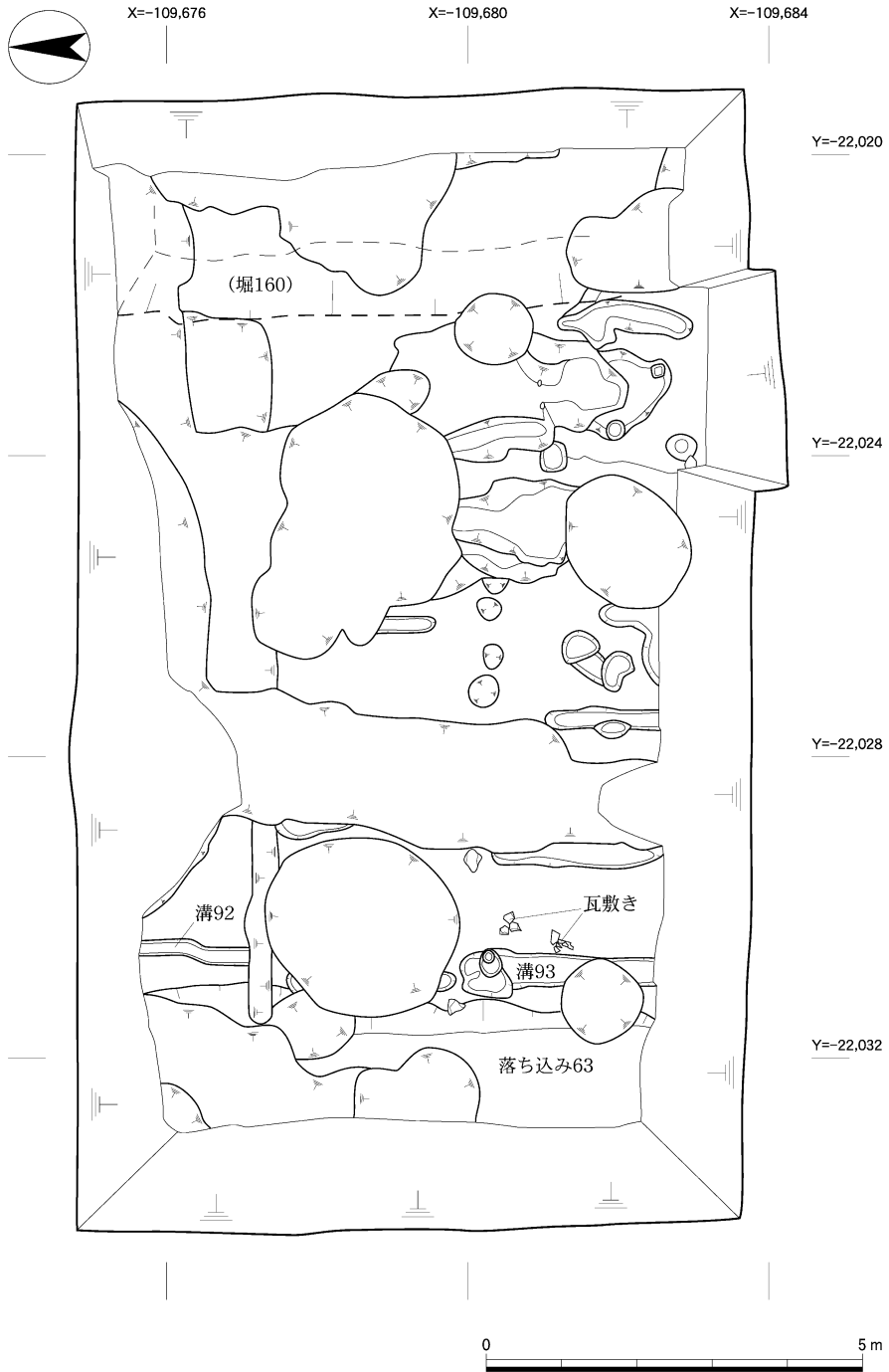


図15 1区第4面平面図 (1:100)

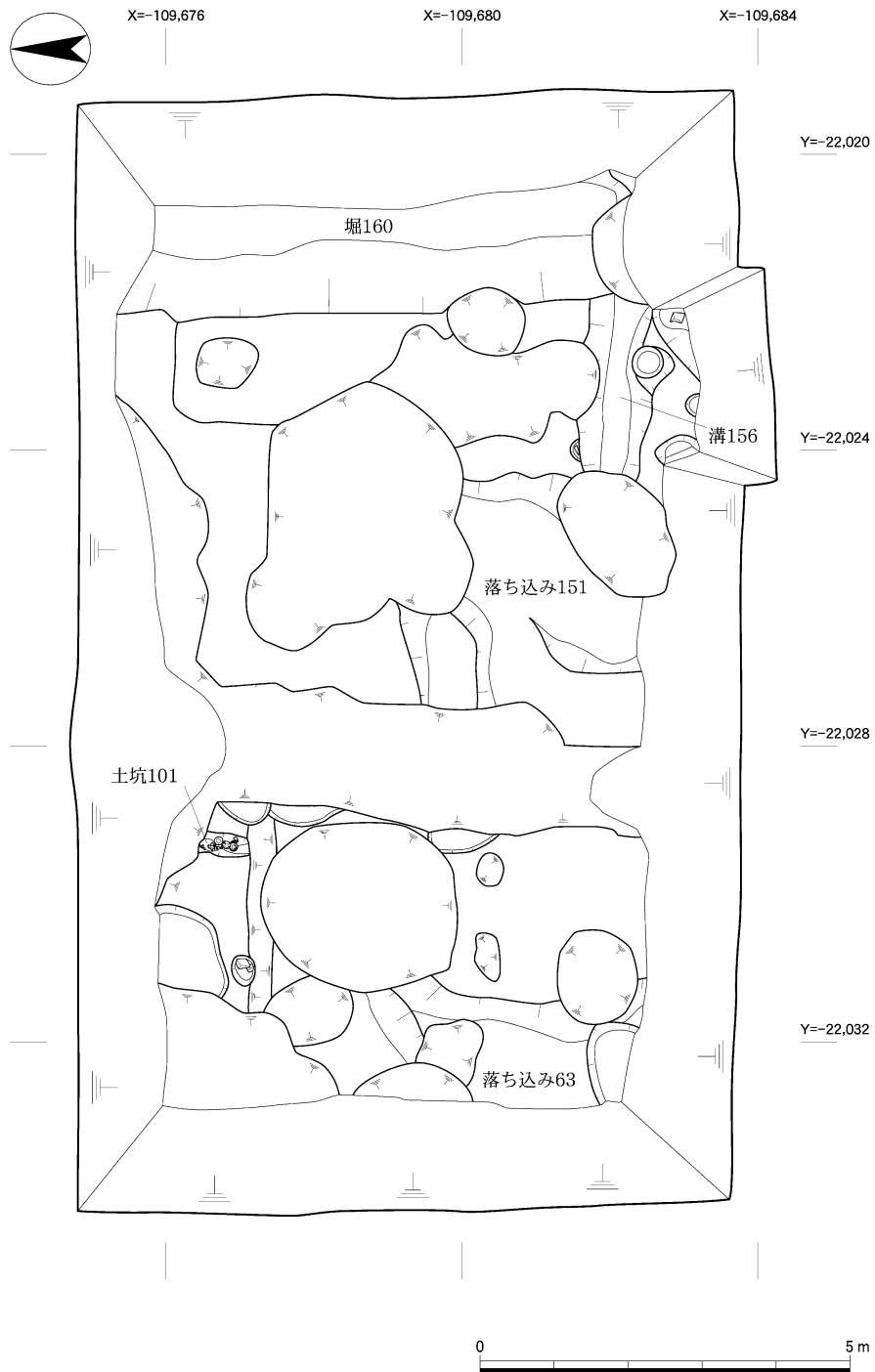
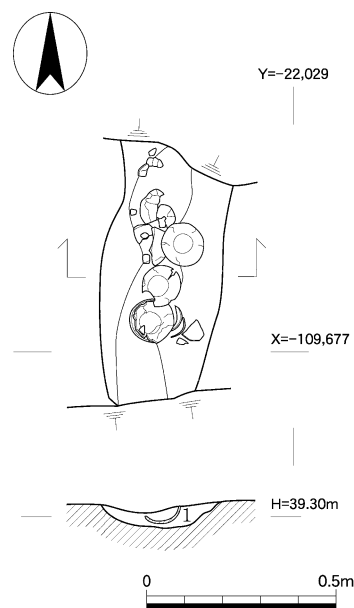


図 16 1区第5面平面図 (1 : 100)

堀 160 (図 12、図版 6-2) 調査区の東端で検出した南北方向の堀である。検出長は南北約 7 m、検出幅は約 2.2 m である。東肩は調査区外にあり確認できなかったが、断面から推測される堀の形状は逆台形で、幅は 3 m 以上あると考えられる。深さは 1.0 ~ 1.1 m である。堀底の標高は 38.3 m 前後で北と南で明瞭な傾斜は認められない。底に砂粒の堆積は無く、流水はなかったと考えられる。南西隅で若干立ち上がり認められるが、底の凹凸の一部である可能性も考えられ、堀がここで途切れるのか、さらに南に延長、もしくは屈曲するかの判断は調査区内ではできなかった。北側の延長は 2 区でも確認している。埋土は最下層が礫をやや多量に含む (図 12 - 27 層) 他は、土質の似た土がブロック状に堆積し (図 12 - 19 ~ 26 層)、最上層は、安土桃山時代の遺物を含む整地層 (図 12 - 16 層) で覆われる。埋土から出土した土器の年代は 15 世紀後半に位置付けられるものが大半を占め、16 世紀前半代のものが少量見られる。



1 7.5YR4/4 褐色シルト～細砂  
炭微量に混じる、固く締まる

図 17 土坑 101 実測図 (1 : 20)

#### (6) 1 区第 5 面の遺構 鎌倉時代から室町時代前期 (図 16、図版 5-3・6-1)

この面で検出した主要な遺構には、土坑 101、落ち込み 63・151、溝 156 がある。堀 160 については上述の通りである。

土坑 101 (図 17、図版 6-3) 調査区北西で検出した。形状は南北に長い溝状を呈するが、北・南ともに削平を受け、本来の形状が不明であるため土坑とした。検出長は南北 0.7 m、幅 0.3 m、深さは 0.05 m である。埋土から完形の土師器皿がまとまって出土した。土師器皿の多くは正位置に据えられ、3 枚が重なるものもあった。意図的に埋められたものと推測される。

落ち込み 63 調査区西端で検出した。安土桃山時代まで踏襲される落ち込みである。この段階では、平坦面との高低差は最も大きいところで、約 0.3 m である。

落ち込み 151 調査区中央部南側で検出した。南北 3.0 m、東西 3.0 m の範囲を検出した。北から南に傾斜する。北端と南端の高低差は約 0.3 m である。埋土からは、13 ~ 14 世紀代の土器・陶磁器類・瓦が出土した。北東から南西に傾斜する自然地形に起因するものと考えられる。

溝 156 調査区南東で検出した。東西方向の溝である。検出長は 2.4 m、幅 0.8 ~ 1.0 m、深さは約 0.3 m である。断面形は挿鉢状を呈する。溝底の標高は西端 39.07 m、東端 38.92 m で、西から東に緩やかに傾斜する。埋土は 10YR4/4 褐色礫混じりシルト～細砂である。埋土からは 13 世紀～14 世紀初頭の土師器皿、奈良火鉢、輸入陶磁器白磁碗、軒丸瓦、軒平瓦などが出土した。

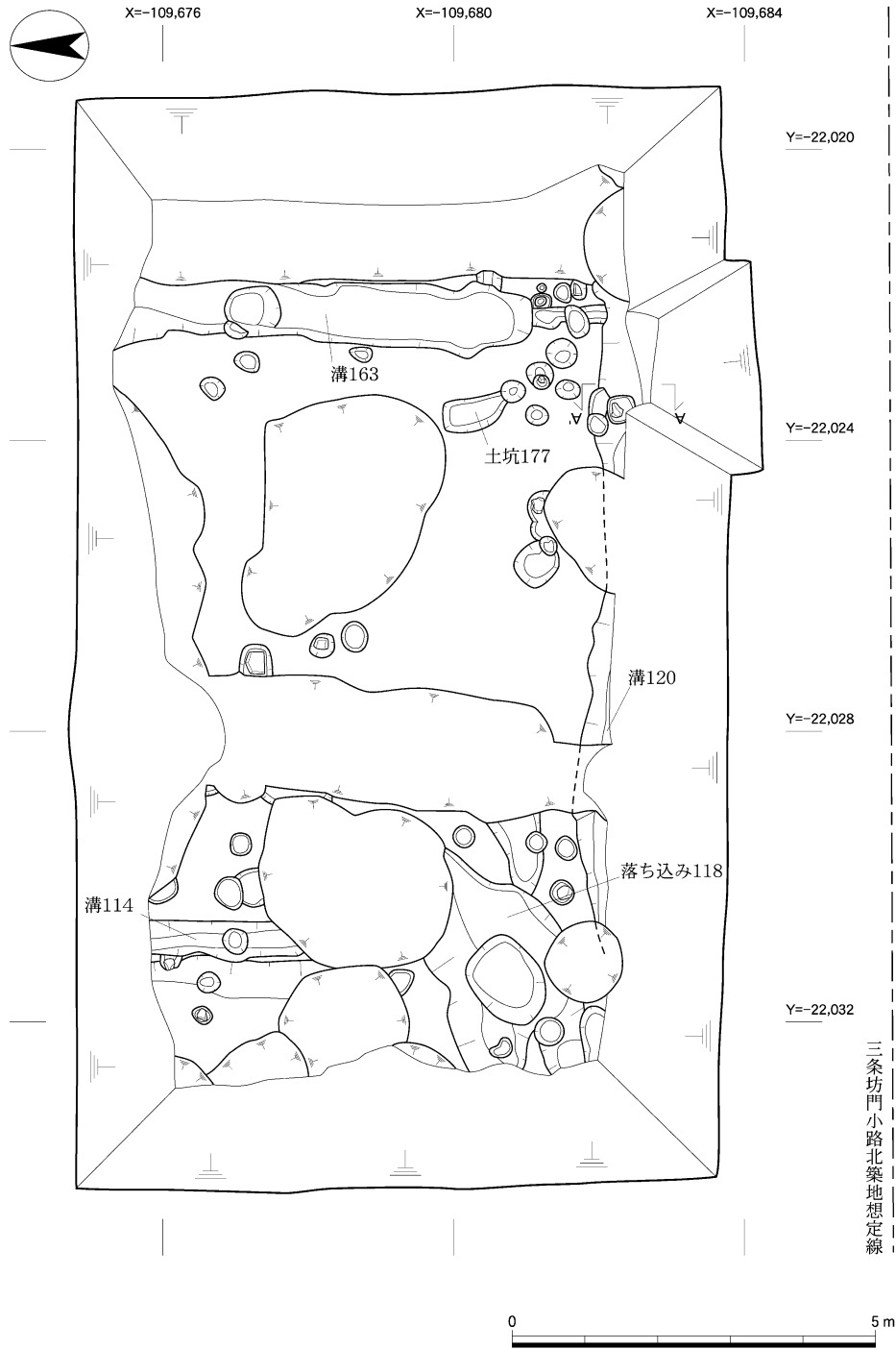


図 18 1区第6面平面図 (1 : 100)



(7) 1区第6面の遺構 平安時代 (図18、図版7-1・7-2)

この面で検出した主要な遺構には、土坑177、溝114・120・163、落ち込み118がある。全て11世紀後半から12世紀におさまる平安時代後期に帰属する遺構である。その他、小規模なピットを多数検出したが、建物としてのまとまりは捉えられなかった。

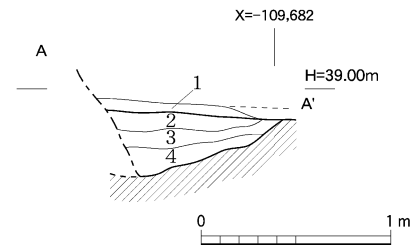
土坑177 調査区南東で検出した。南北0.9m、東西0.45mのいびつな方形で、深さは0.1mある。埋土は10YR4/2 灰黄褐色粗砂混じりシルト～細砂で炭化物が少量混じる。土師器や輸入陶磁器類がややまとまって出土した。

溝114 調査区北西で検出した。南北方向の溝である。検出長は2.1m、幅0.4～0.5m、深さは0.25mある。溝底は平坦面を持ち、断面は逆台形状を呈する。底の標高は38.93m前後で、南北で傾斜はほとんどない。埋土は10YR5/3にぶい黄褐色粗砂混じりシルト～細砂である。土師器、須恵器、瓦質土器、瓦片などが出土した。

溝120 (図19、図版7-3) 調査区南端で検出した東西方向の溝である。検出長は8.8m、検出最大幅は0.75mある。南肩は調査区外にあり確認できなかったが、断面から溝本来の幅は1.0m以上と推測される。検出できた範囲での溝の深さは、0.2～0.35mある。明確な溝底を検出できた箇所が少ないため、傾斜は不明である。最下層に遺物をあまり含まないやや粒径の大きい砂粒が堆積する (図19-4層)。溝の機能時の流水堆積の可能性がある。埋土は大きくは上下2層に分かれるが、いずれにも土師器皿と炭化物が多量に混じる。特に最上層 (図19-2層) には、土師器皿が大量に混じっていた。遺物の時期は12世紀末頃のものでまとまりがあり、短期間に一気に埋められたと考えられる。

溝163 調査区北東で検出した。南北方向の溝である。検出長は5.7m、幅0.8～1.0m、深さは0.15～0.55mある。南端X=-109,681ラインで立ち上がる。北側の延長部分は2区でも確認している。溝底は平坦面を持ち、断面の形状は逆台形を呈する。溝底の標高は北端38.67m、南端38.73mで、南から北に向かってわずかに傾斜する。埋土は10YR3/3 暗褐色やや粘質シルト～細砂である。出土遺物は少ないが、緑釉陶器碗破片や瓦質土器鍋、瓦片のほか12世紀代に位置付けられる土師器皿が出土している。

落ち込み118 調査区南西隅で検出した。不整形な落ち込みで、検出範囲は東西約3m、南北約2.2mで、深さは0.1～0.2mある。中央部が、径約1.1～1.2mの楕円形にさらに約0.2m深くなる。全体的には北東から南西に向かって傾斜する。埋土は、2.5Y3/3 暗オリーブ褐色シルトで炭化物を多量に含む。また、土師器皿をはじめとする遺物を多量に包含していた。輸入陶磁器白磁碗や瓦器碗なども出土している。遺物の時期は11世紀後半でまとまりが見られる。



- 1 10YR3/1 黒褐色シルト～細砂、粗～極粗砂混じる、炭・土器少量含む (鎌倉時代整地層)
- 2 10YR2/1 黒色シルト～細砂やや粘質、粗～極粗砂混じる、炭・土器多量に含む (溝埋土)
- 3 10YR2/1 黒色シルト～細砂やや粘質、粗～極粗砂混じる、φ1～10cm礫・土器少量、炭多量に含む (溝埋土)
- 4 10YR3/1 黒褐色細～中砂、φ1～3cm礫・炭少量含む (溝埋土)

図19 溝120断面図 (1:40)

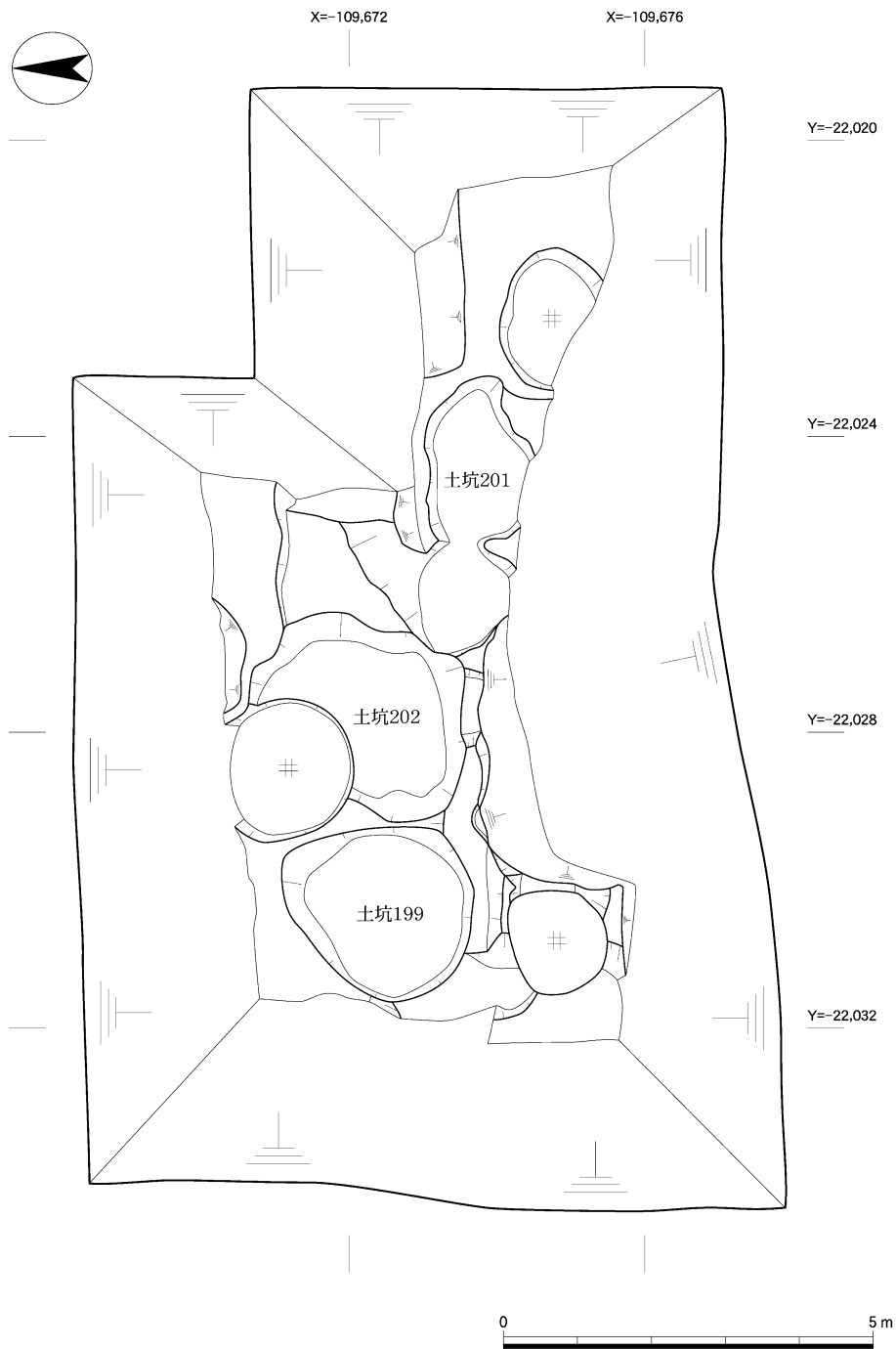


图 20 2区第1面平面图 (1 : 100)

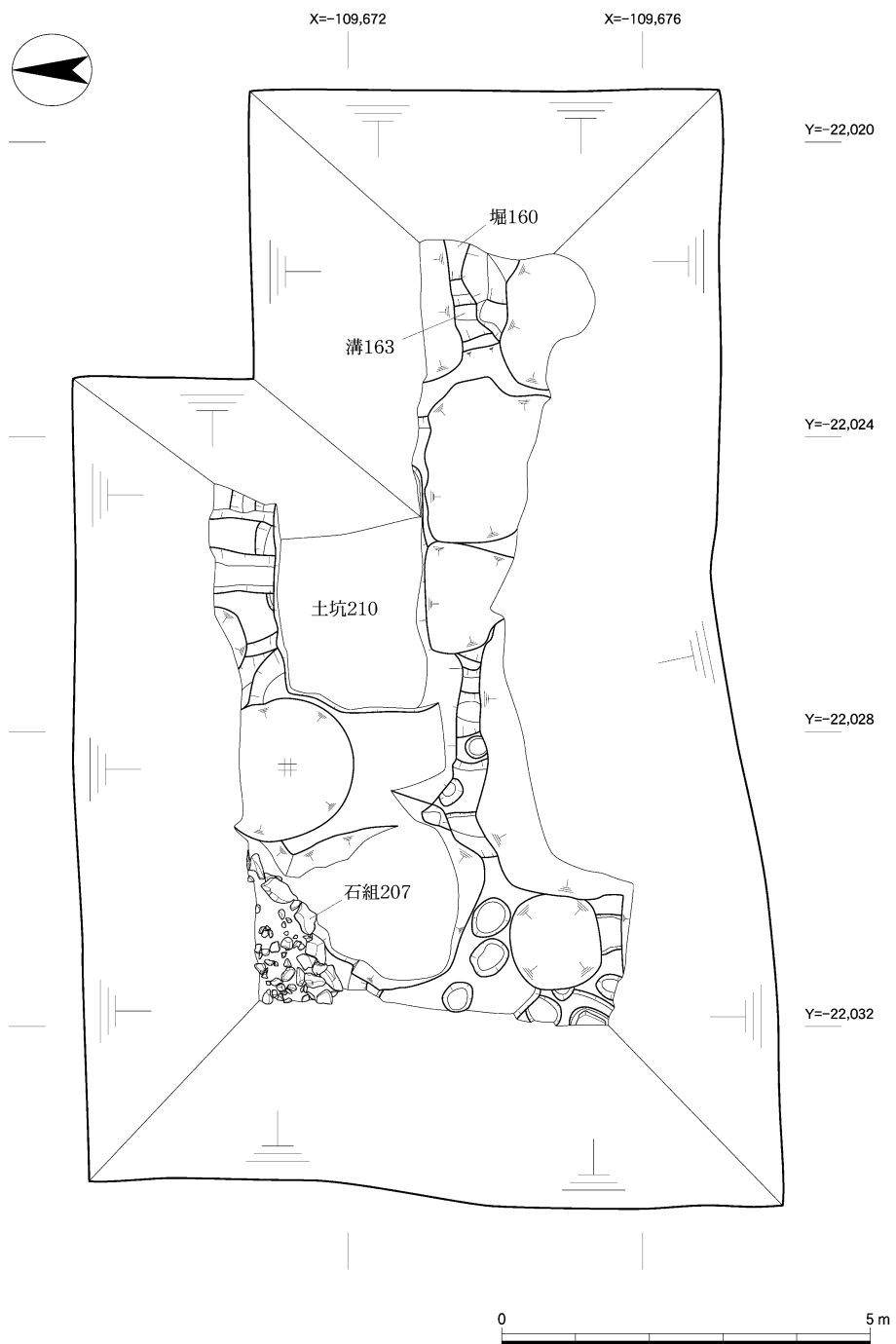


图 21 2区第2面平面图 (1:100)

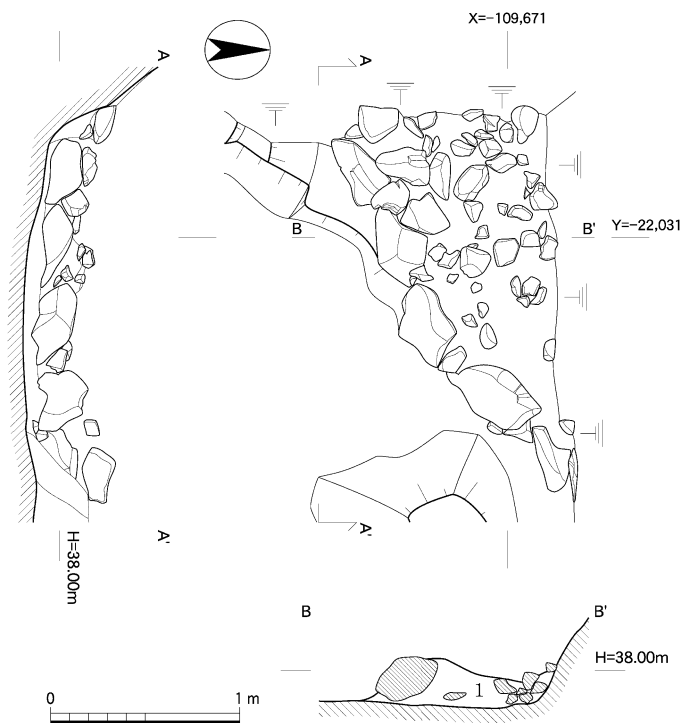
(8) 2区第1面の遺構 江戸時代 (図20、図版8-2)

この面で検出した主要な遺構には、土坑199・201・202のほか、井戸が4基ある。井戸は全て埋土に漆喰や焼瓦を含み、江戸時代後期以降に埋まったものと考えられる。土坑199・201・202は、いずれも不整形な土坑で、壁が抉られるように掘られていることから土取りを行ったのち、廃棄物処理土坑として利用したと考えられる。出土遺物は17世紀後半から18世紀前半のものである。なお、文化財保護課より、GL-3.0mを超えての掘削は行わないようにとの指導があったため、土坑201・202については底を確認していない。土坑199からは、土師器皿、信楽焼播鉢、輸入青花椀、漆器椀、軒丸瓦などが出土した。土坑201からは、土師器皿、染付椀、施釉陶器などの他金属滓が少量出土した。土坑202からは、土師器皿、常滑焼甕、施釉陶器肥前系椀、瀬戸美濃系天目茶椀、染付皿、輸入陶磁器青花椀、曲物の蓋、軒瓦などが出土した。

(9) 2区第2面の遺構 安土桃山時代以前 (図21、図版8-1)

この面で検出した主な遺構には、石組207、土坑210、堀160、溝163がある。その他、調査区南西では、平安時代後期の遺物を含むピット群を検出したが、建物としてのまとまりは捉えられなかった。

石組207 (図22、図版8-3) 調査区北西隅で検出した。径40cm前後の砂岩を北東から南西



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、粘質粗～極粗砂混じり  
φ3～15cmの礫多量・炭少量混じる

図22 石組207実測図(1:40)

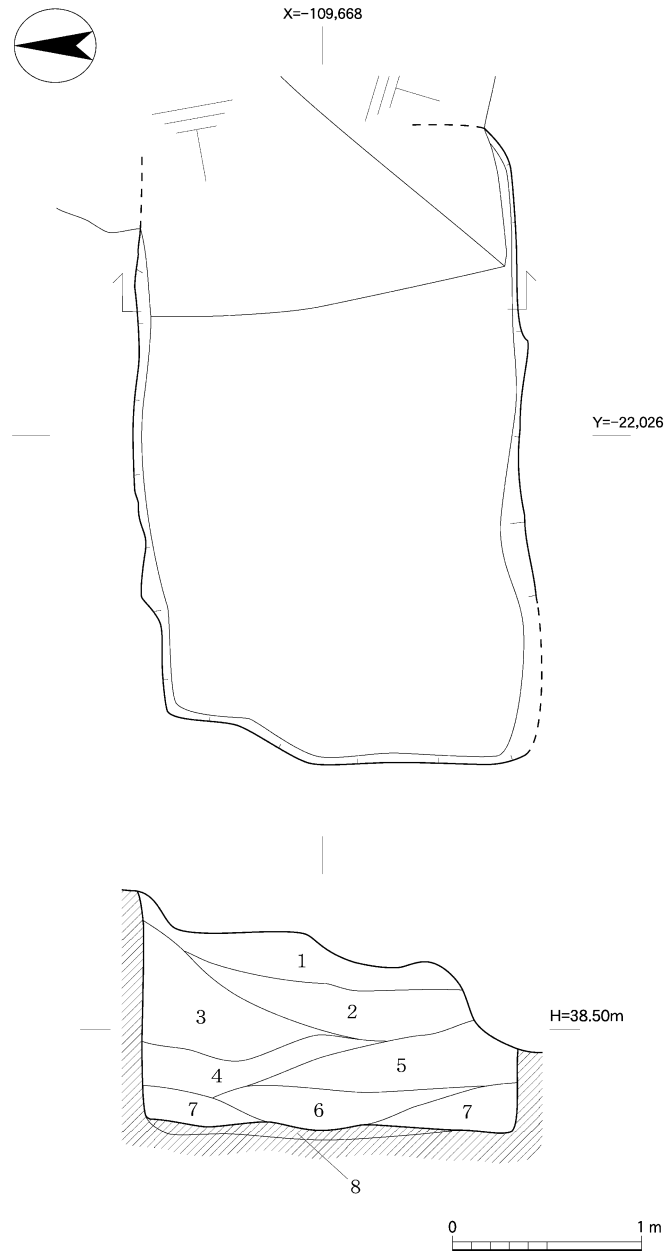
方向に並べる。この石列のラインは緩やかにカーブを描く。その北側は径5～20cmの礫が比較的密に詰まる。この礫群の間からは16世紀後半に位置付けられる遺物が出土している。この石組207は、調査区南側の基盤層が高く残る箇所からは約1m下がったところで成立する。この高低差が自然地形に起因するものか、人為的なものかは調査区内では判断できなかった。調査区西壁断面(図6)では、この石組が断面11層で埋められているようにも捉えられた。しかし、大半が江戸時代の土坑で壊されており、11層は西壁付近にわずかに残るのみで

あった。また、11層からは遺物がほとんど出土しなかったことから、落ち込みが埋まった時期も明瞭ではなく、石組207との関連は不明である。

土坑210(図23) 調査区中央で検出した大規模な方形土坑である。北西部は調査区外にあるが、平面形は、東西3.3m、南北2mの東西に長い長方形と推測される。深さは約1.2mある。底は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。底に構築物などは認められなかった。埋土からは、16世紀末頃の土師器皿、信楽焼播鉢、常滑焼甕、瓦質羽釜、輸入青磁椀などが出土した。

堀160 調査区東端で検出した。1区で検出した室町時代後期の堀の延長部分である。上半は攪乱を受ける。検出長は0.6m、検出幅は0.9mである。底の標高は38.25m前後で、検出北端では38.35mとやや浅くなる。

溝163 調査区東で検出した。1区第6面で検出した平安時代後期の溝の延長部分である。検出長は0.5m、検出幅は0.45mである。溝底の標高は38.6m前後で、検出北端では38.8mとやや浅くなる。



- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト～細砂、φ1～3cmの礫、炭少量混じる、固く締まる
- 2 10YR4/1 褐灰色粗砂混シルト～細砂やや粘質、φ1～2cmの礫少量、鉄分多量、炭少量混じる
- 3 10YR3/1 黒褐色粗砂混シルト～細砂、1cm以下の礫少量、炭多量混じる、締まり悪い
- 4 10YR5/2 灰黄褐色粗～極粗砂混シルト～中砂、φ1cm以下の礫少量、炭微量混じる
- 5 10YR4/2 灰黄褐色粗砂混シルト～細砂、φ1～2cmの礫少量、炭少量混じる、下半グライ化
- 6 N3/0 暗灰色粘質シルト～細砂、φ1～2cmの礫少量、炭少量、木片少量混じる、グライ化
- 7 10YR4/2 灰黄褐色粗～極粗砂混シルト～細砂、φ1～3cmの礫多量、炭少量混じる、一部グライ化
- 8 5B5/1 青灰色粘質シルト～細砂(基盤層)

図23 土坑210実測図(1:40)

## 4. 遺物

今回の調査では整理コンテナにして54箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類・瓦類・石製品・金属製品・木製品・铸造関係遺物などがある。時期は弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代のものがある。平安時代中期から後期の遺物が最も多く、全体の約3割を占める。次いで江戸時代の遺物が多く、鎌倉時代、室町時代の遺物は少ない。弥生時代の遺物は微量である。

以下では、種類ごとに遺物の概要を述べる。

### (1) 土器・陶磁器類

出土した土器・陶磁器類には、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、輸入陶磁器がある。時期は弥生時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代のものがある。弥生土器は江戸時代の遺構に混入して数点出土したのみであるが、調査地は烏丸御池遺跡にもあたり、周辺に遺構が存在する可能性を示唆する遺物として注目できる。甕や壺の破片があり、時期は弥生時代後期から庄内式並行期に位置付けられるものである。平安時代のものは大半が中期後半から後期に属するもので、前期のものは緑釉陶器などが後世の遺構に混入して少量見られるのみであった。

以下では、主要な遺構から出土した土器・陶磁器類について遺構別に時代の古いものから概要を述べる。法量、胎土などの情報は表4にまとめた。

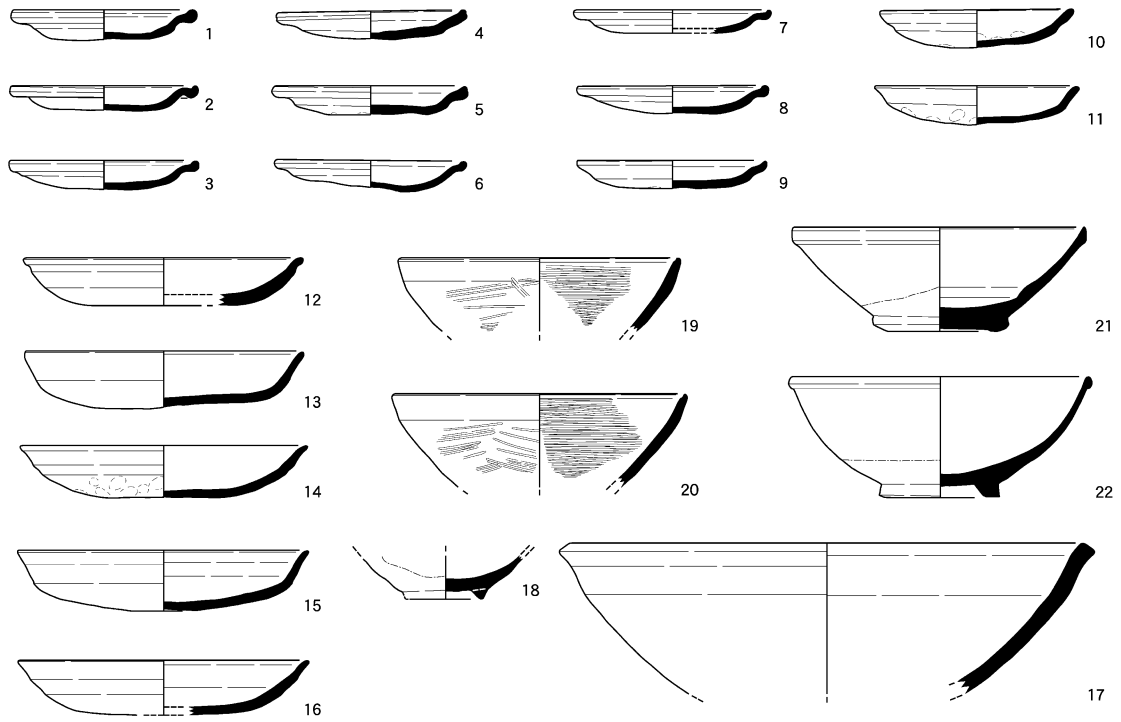
なお、出土遺物の時期は、平安京の土器編年案<sup>1)</sup>に準拠する。

表3 遺物概要表

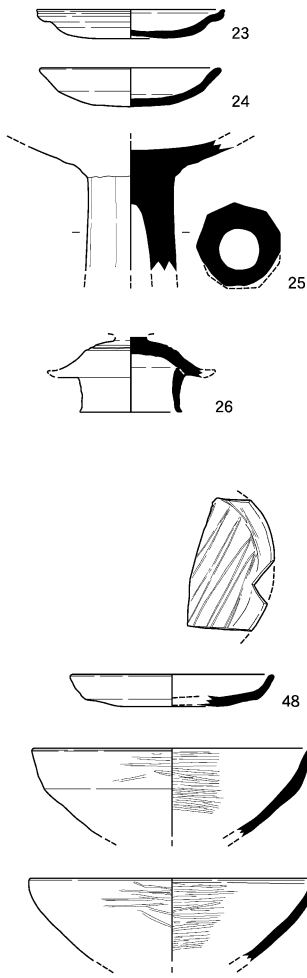
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器				
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品		土師器40点、須恵器1点、灰釉陶器1点、瓦器8点、輸入陶磁器5点、瓦9点、鉄製品1点：計64点	15箱	0箱
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、山茶碗、瓦器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品		土師器27点、白色土器3点、山茶碗2点、施釉陶器1点、輸入陶磁器2点、瓦14点、金属製品4点、石製品2点：計55点	11箱	0箱
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、施釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、銭貨、金属製品、石製品		土師器29点、施釉陶器23点、焼締陶器8点、国産磁器4点、瓦2点、金属製品1点、石製品2点：計69点	26箱	2箱
合計		64箱	189点(10箱)	52箱	2箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より10箱多くなっている。

落ち込み118



土坑177



溝120

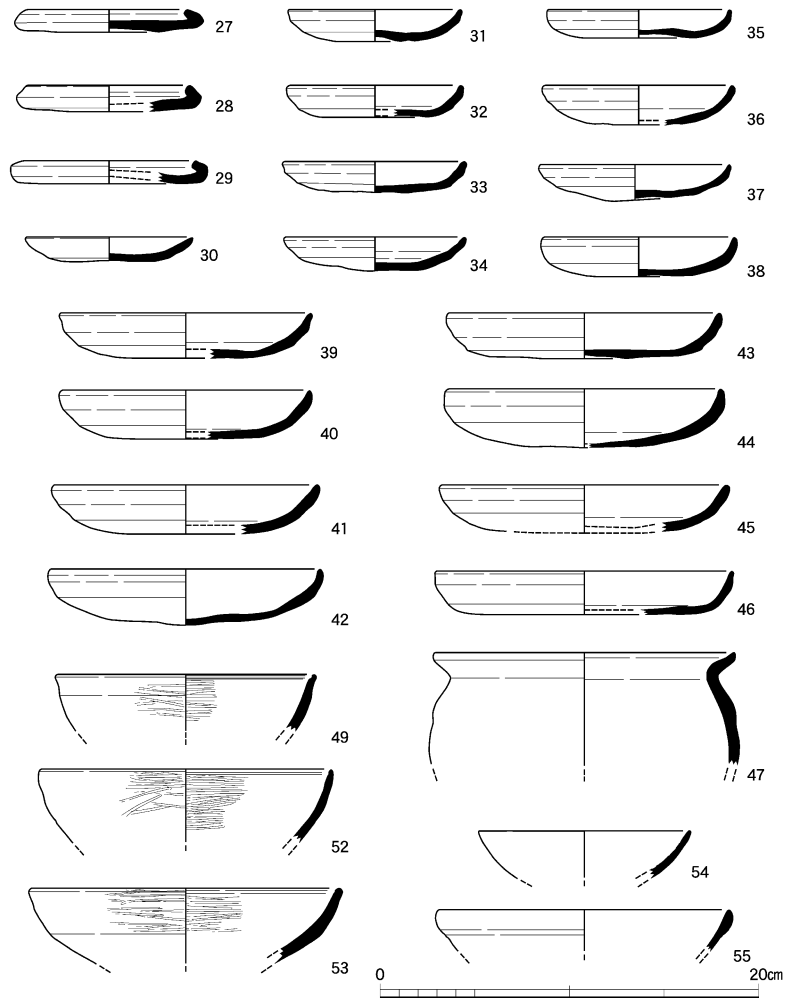


図24 落ち込み118、土坑177、溝120出土土器実測図(1:4)

## 1) 平安時代の土器・陶磁器類 (図 24、図版 9)

落ち込み 118 土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、輸入陶磁器白磁、軒平瓦、平瓦などが出土した。京都Ⅳ期新段階に属する一群である。

1～16 は土師器皿である。小型皿にはいわゆる「て」の字状口縁のもの(1～9)と直線口縁のもの(10・11)がある。口径は「て」の字状口縁のものは 9.5～10.0 cmの間に分布する。直線口縁のものはそれぞれ 10.1 cmと 10.7 cmある。大型皿(12～16)は、口縁端部を 2 段にヨコナデする。口径は 14.4～15.4 cmの間に分布する。17 は須恵器の鉢である。口径は 26.8 cm。外面に自然釉が付着する。18 は灰釉陶器碗の底部である。高台は断面三角形の付高台である。内底部と高台接地部に重ね焼き痕が認められる。19・20 は樟葉型の瓦器碗である。口縁端部内面には浅い沈線がめぐる。21・22 は輸入陶磁器の白磁碗である。大宰府の陶磁器分類<sup>2)</sup>では、21 は白磁碗Ⅳ-1 類、22 は白磁碗Ⅱ-0 類に分類されるもので、いずれも 11 世紀後半から 12 世紀前半の標識遺物である。白磁碗Ⅱ-0 類は、釉が緑味で透明、胎土は白く上質な例とされるが、22 も同様の特徴をもつ。

土坑 177 土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器白磁・青磁などが出土した。実測できたものは少ない。京都Ⅳ期新段階からⅤ期古段階に位置付けられる。

23 はいわゆる「て」の字状口縁の土師器皿である。口径は 9.9 cm。24 は直線口縁の土師器小型皿である。口径は 9.4 cm。25 は土師器高杯である。脚柱部の面取りは 9 面を数える。26 は輸入陶磁器青磁の蓋である。宝珠形のつまみが付く水注の蓋と考えられる。かえり部は比較的長くのびる。かえり部と内面は露胎である。釉は透明度が高く、胎土には黒色砂粒を多く含む。越州窯産か。

溝 120 土師器、白色土器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器白磁・褐釉、軒瓦、丸・平瓦、鉄製品などが出土した。京都Ⅵ期古段階に属する一群である。

27～46 は土師器皿である。土師器皿にはコースター形(27～29)、小型皿(30～38)、大型皿(39～46)がある。口径はコースター形のものが 8.2～9.0 cm、小型皿が 8.8～10.1 cm、大型皿が 13.0～15.6 cmの間に分布する。47 は土師器の甕である。口径は 15.9 cm。48 は瓦器の皿で、内面にジグザグ状の暗文を施す。49～53 は瓦器碗である。49 は大和型、50～53 は樟葉型である。54・55 は輸入陶磁器白磁碗である。54 は小型の碗で、内面に篋描きの草花文を施す。55 は口縁端部に玉縁のつくタイプのものである。

## 2) 鎌倉時代の土器・陶磁器類 (図 25、図版 9)

第 5 面整地層 土師器、白色土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、瓦器、輸入陶磁器白磁、軒丸瓦、丸・平瓦、鉄製品、石鍋などが出土した。整地層という性格上、遺物の時期にはやや幅が見られるが、最も新しいものは京都Ⅵ期中段階に位置付けられる。

56～64 は土師器皿である。コースター形(56)、小型皿(57～60)、大型皿(61～64)がある。口径はコースター形が 6.6 cmあり、小型皿は 8.4～9.2 cm、大型皿は 13.0～16.0 cmの間に分布する。65～67 は白色土器である。65 は小型皿で底部は糸切りする。66 は付け高台の皿、67 は高杯で



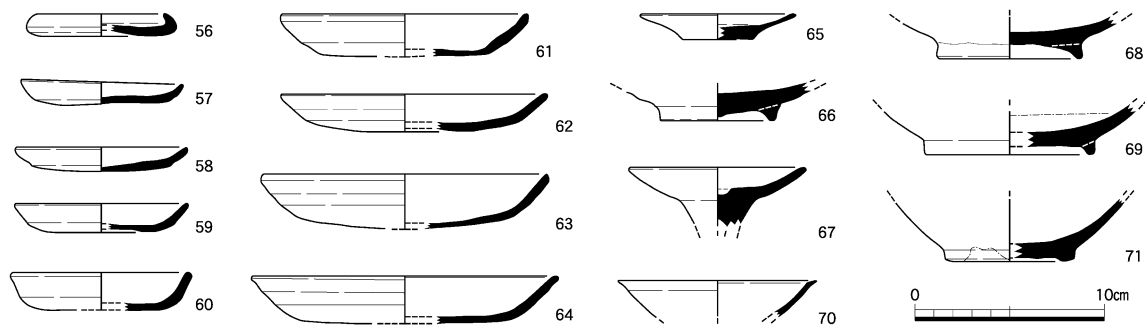


図 25 第5面整地層出土土器実測図（1：4）

ある。68・69は山茶椀である。69は硯に転用され、底部内面に隅が付着し平滑になる。70・71は輸入陶磁器白磁椀である。71は底部しか出土していないが、口縁端部に玉縁の付くタイプと考えられる。

### 3) 室町時代の土器・陶磁器（図 26、図版 10）

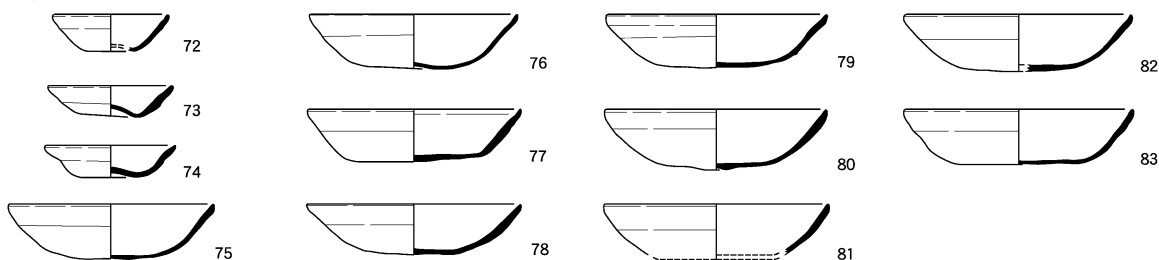
土坑 101 土師器、須恵器、丸瓦が出土した。出土した土師器は全て白色系の皿である。京都 VII 期新段階に属する一群である。

72～83は土師器皿である。72～74は底部が内側に突出する「へそ皿」である。口径は6.0～6.8 cm。75～83は大型皿で、口径は10.7～12.0 cmの間に分布する。

堀 160 土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器白磁・青磁、軒丸瓦、軒平瓦、丸・平瓦、銅製品、砥石などが出土した。出土した土師器皿は京都 IX 期古段階のものが多いが、最も新しいものは京都 X 期古から中段階に位置付けられる。

84～89は土師器皿である。全て白色系で、口縁部が斜め上方にのび深みのある京都 IX 期古段階に位置付けられるもの（84・85・87～89）と、口縁部が外に開き、器高の低い京都 X 期古から新段階に位置付けられるもの（86）がある。90は、施釉陶器の瀬戸美濃系小型天目茶椀である。

#### 土坑101



#### 堀160

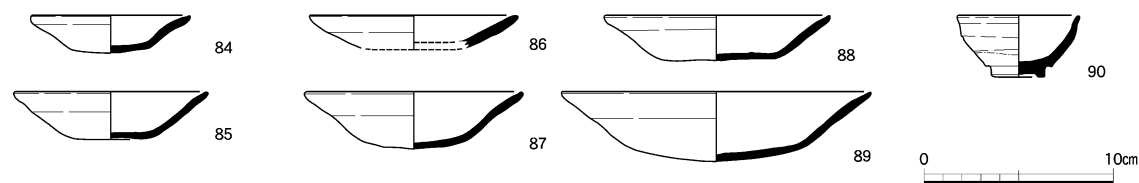


図 26 土坑 101、堀 160 出土土器実測図（1：4）

#### 4) 安土桃山時代から江戸時代初頭の土器・陶磁器類 (図 27、図版 10)

竈 57 炭層・埋土 竈 57 炭層からは、土師器、瓦器、施釉陶器、平瓦が出土した。埋土からは、土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦器、輸入陶磁器青磁、平瓦が出土した。

91・92 は埋土から出土した土師器皿である。口径は 10.2 と 10.5 cm。92 は灯明皿として使用されている。京都 X 期新段階に位置付けられるか。93 は炭層出土の施釉陶器瀬戸美濃系天目茶碗である。94 は埋土の礫群最上層から出土した施釉陶器肥前系椀である。17 世紀初頭に位置付けられる。

竈 57 掘形 土師器、焼締陶器、施釉陶器、瓦器、輸入陶磁器青磁、丸・平瓦が竈 57 の掘形と、礎石周辺から出土している。

95・96 は土師器皿である。口径は 10.3 と 10.6 cm。いずれも灯明皿として使用されている。京都 X 期新段階に位置付けられるか。97 は焼締陶器の備前焼甕の口縁である。98～100 は焼締陶器の信楽焼播鉢である。播り目は、99 が 4 条 1 単位、98・100 が 5 条 1 単位である。101 は施釉陶器の黄瀬戸皿である。

竈 66 炭層・埋土 竈 66 炭層からは土師器、平瓦が出土した。埋土からは土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器青磁、丸・平瓦、銅製品、鉄製品が出土した。

102 は炭層から出土した土師器皿である。口径は 14.6 cm である。103 は埋土から出土した施釉陶器の肥前系椀である。17 世紀初頭に位置付けられる。

落ち込み 63 落ち込み 63 の最終埋土からは、土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器青磁・白磁、丸・平瓦が出土した。

104～106 は土師器皿である。口径は 10.2～13.8 cm。京都 XI 期古段階に位置付けられるか。104・105 は灯明皿である。107 は焼締陶器の信楽焼播鉢である。播り目は 5 条 1 単位である。108 は施釉陶器の肥前系皿である。109 は施釉陶器の瀬戸美濃系椀である。底部しか残存しないが、天目釉がかかる。17 世紀初頭に位置付けられる。

土坑 210 土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器青磁・白磁、丸・平瓦などが出土した。

110～114 は土師器皿である。口径は 10.5～10.9 cm でまとまりがみられる。111～114 は灯明皿である。器壁がやや厚みがあり、京都 XI 期古段階に属する一群である。

井戸 153 土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器青磁・青花、平瓦、鉄釘、砥石などが出土した。

115 は土師器小皿である。口径は 7.0 cm。116 は焼締陶器の信楽焼播鉢である。播り目は 5 条 1 単位である。117～119 は施釉陶器である。117 は瀬戸美濃系黒茶碗、118 は瀬戸美濃系天目茶碗、119 は肥前系椀である。17 世紀初頭に位置付けられる。

石組 207 土師器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器白磁、丸・平瓦などが出土した。

120・121 は土師器皿である。口径は 8.8 と 8.4 cm。京都 X 期新段階に位置付けられる。122 は施釉陶器の黄瀬戸壺底部である。

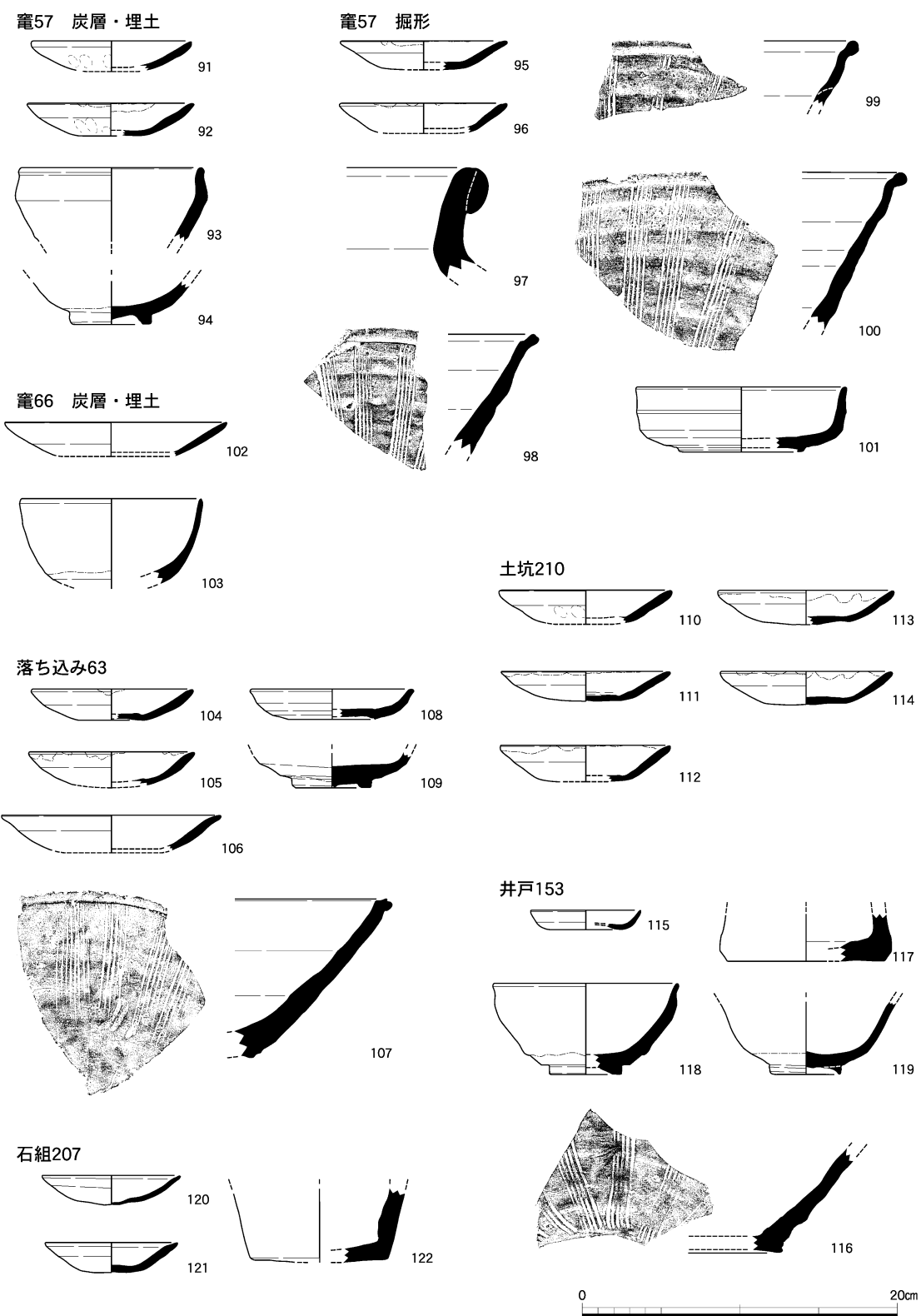
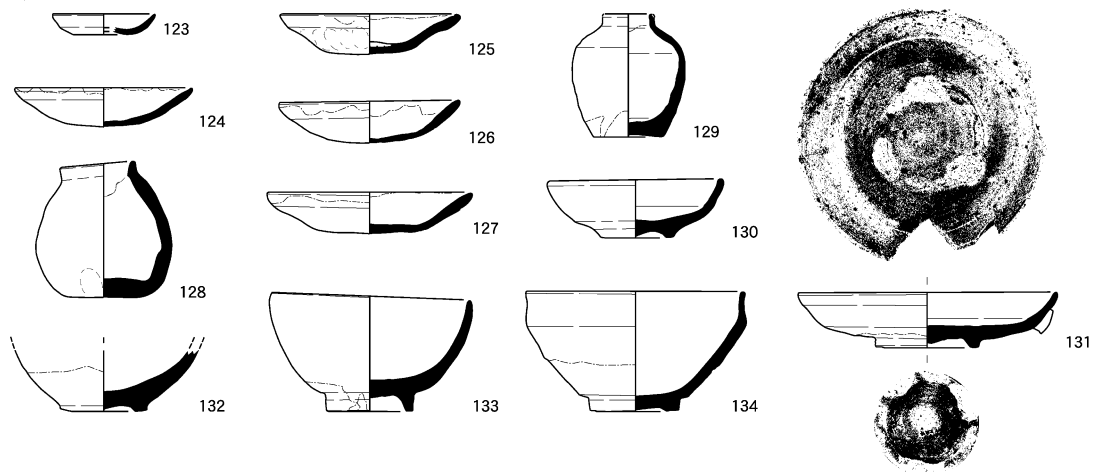


図 27 竈 57・66、落ち込み 63、石組 207、土坑 210、井戸 153 出土土器実測図（1：4）

土坑74



炉 1

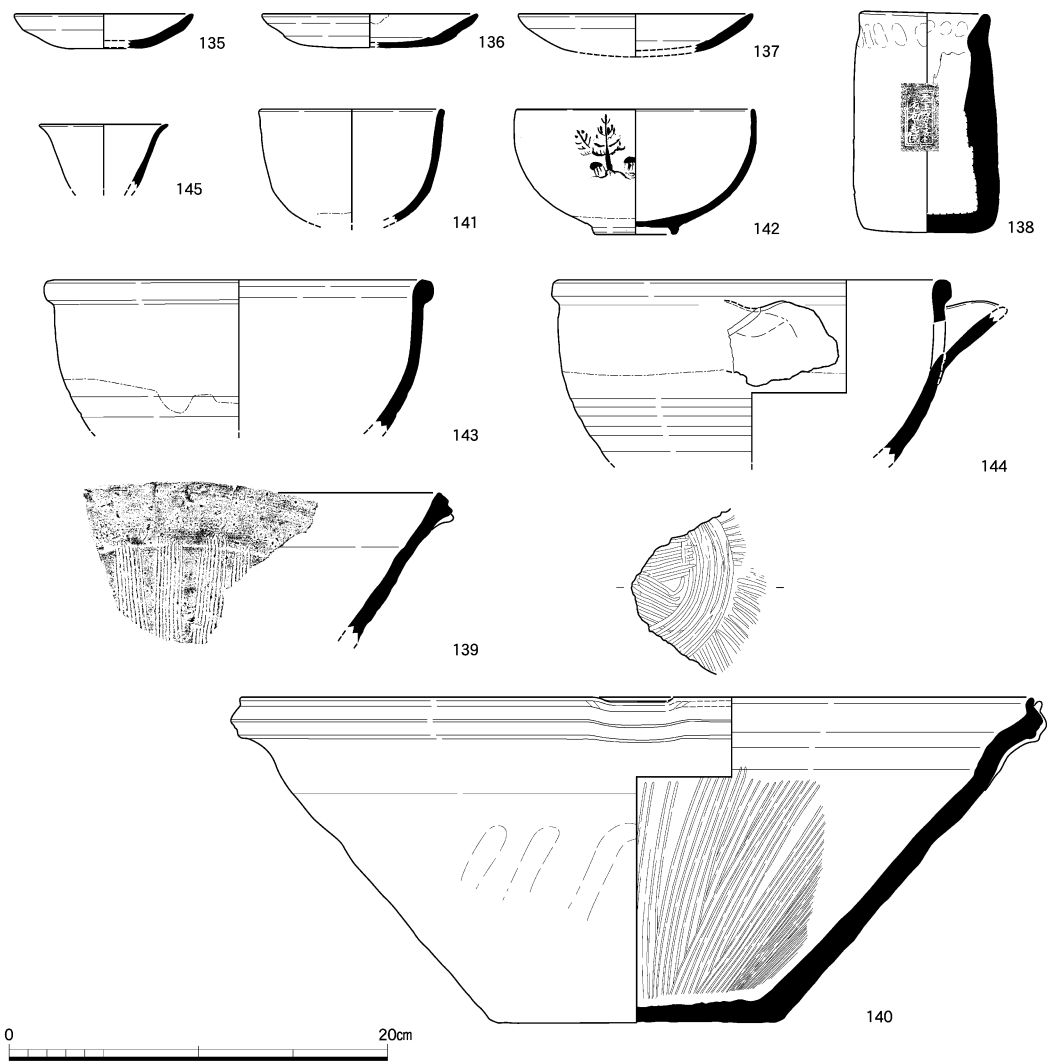


图 28 土坑 74·1 出土土器实测图 (1 : 4)

5) 江戸時代の土器・陶磁器類 (図 28・29、図版 11)

土坑 74 土師器、須恵器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器青花・白磁、軒平瓦、丸・平瓦、硯、鉄滓、銅滓、炉壁、鞆羽口、銭貨、鉄釘などが出土した。

123～127は土師器皿である。123は小型皿で口径5.4cm、ほかは全て灯明皿で、口径は9.2～105cmの間に分布する。京都XI期古段階に位置付けられる。128は土師器の小型壺である。手づくねで成形される。129は、施釉陶器の瀬戸美濃系小型壺である。茶入として利用されたものか。130～133は施釉陶器の肥前系皿と椀である。131の皿は、底部内面と高台接地部にトチン痕が3ヶ所付く。134は施釉陶器の瀬戸美濃系天目茶椀である。

炉 1 土師器、焼締陶器、瓦器、施釉陶器、輸入陶磁器青花、丸・平瓦などが出土した。

135～137は土師器皿である。口径は9.2～12.0cm。京都XI期中段階に位置付けられる。138は土師器塩壺である。外面に「天下一堺ミなど／藤左衛門」のスタンプが押される。139は焼締陶器の信楽焼播鉢である。播り目は7条1単位である。140は焼締陶器の丹波焼播鉢である。141は施釉陶器の肥前系椀、142は京焼の椀である。外面文様部を軽く凹ませる。143・144は施釉陶器の肥前系片口鉢である。144は把手が付く。145は肥前系白磁の杯である。

土坑 17 土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、染付磁器、丸・平瓦などが出土した。17世紀後葉から18世紀前葉に位置付けられるものである。

146・147は土師器皿である。口径は11.7と12.5cm。148は土師器の焙烙である。無い外面ともに煤が付着する。149は施釉陶器の肥前系椀である。高台接地部をのぞき全面施釉する。150は施釉陶器の京焼の椀である。内面に文様を描く。151・152は染付磁器の肥前系椀である。高台部の残る152は、底部外面も施釉している。伝世品の可能性がある。153・154は、染付磁器の肥前系皿である。内面底部を蛇の目釉剥ぎする。

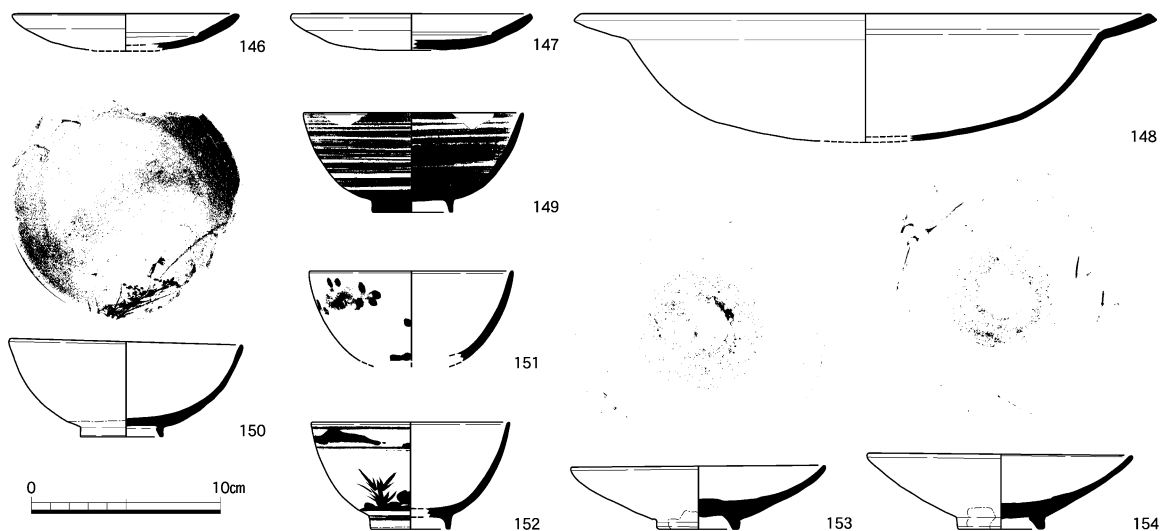


図 29 土坑 17 出土土器実測図 (1 : 4)

## (2) 瓦類 (図 30、図版 12)

瓦類は平安時代中期から江戸時代までの各時代のものが出土している。瓦当は軒丸瓦 6 点、軒平瓦 18 点の計 24 点あり、この他に丸瓦・平瓦が少量出土している。時代別にみると、平安時代後期から鎌倉時代初頭のものが最も多い。

瓦 1 は単弁蓮華文軒丸瓦である。花卉先端にはやや大きな範傷が認められる。瓦当の外周にはヘラ状工具による縦方向のナデが施されている。胎土には白色粒を少量含む。焼成は軟質で、色調は灰白色を呈する。土坑 22 出土。瓦 2 は単弁蓮華文軒丸瓦である。範の磨滅が進んでおり、文様は認識し難い。縦方向に大きな範傷が認められる。瓦当裏面には指押えによる圧痕が認められる。胎土は白色粒を少量含む。焼成はやや軟質で、色調は内外面が黒灰色、断面が灰色を呈する。溝 120 出土。瓦 3 は巴文軒丸瓦である。瓦当部裏面は粗いナデが施されている。胎土は粗く 1～3 mm 大の白色粒・灰色粒をやや多く含む。焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。堀 160 出土。瓦 4 は巴文軒丸瓦。巴文と珠文の間に範傷が認められる。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成は硬質で、色調は灰色を呈する。第 4 面整地層出土。瓦 5・6 は同文の複弁蓮華文軒丸瓦である。胎土はやや粗く 1～3 mm 大の白色粒を含む。焼成は硬質である。色調は瓦 5 が灰色、瓦 6 は 2 次焼成を受けており、橙褐色を呈する。瓦 5 は溝 156、瓦 6 は第 4 面整地層出土。

瓦 7 は均整唐草文軒平瓦である。範の磨滅が進んでおり、文様は不鮮明で左端は全く文様が認められない。瓦当部凹凸面は横方向ヘラケズリを施す。平瓦部凹面はやや粗い布目が、平瓦部凸面には押え痕が顕著に認められる。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成は硬質、色調は灰色を呈する。第 4 面整地層出土。瓦 8 は唐草文軒平瓦である。全体に磨滅が激しい。平瓦部凹面の布目は粗い。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成はやや軟質、色調は内外面が黒灰色、断面が灰色を呈する。落ち込み 118 出土。瓦 9 は唐草文軒平瓦である。偏行唐草文で、唐草は左から右に展開する。瓦当部凹面および凸面は横方向ヘラケズリを施す。瓦当部の成形は半折り曲げ技法による。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成は軟質、色調は灰白色を呈する。土坑 199 出土。瓦 10 は唐草文軒平瓦である。瓦当部凸面は横方向ヘラケズリを施す。瓦当部の成形は半折り曲げ技法による。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成は硬質、色調は灰色を呈する。栗栖野窯産の瓦である。第 1 面整地層出土。瓦 11 は唐草文軒平瓦である。瓦当部凹凸面は横方向ヘラケズリを施す。瓦当部の成形は半折り曲げ技法による。胎土はやや粗く 3 mm 大の砂粒を含む。焼成は軟質、色調は灰白色を呈する。堀 160 出土。瓦 12 は巴文軒平瓦である。瓦当部凹面は横方向ナデを施し、凸面は平瓦部から続くやや粗い布目が残る。平瓦部凸面は縄目タタキが認められる。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成は軟質、色調は内外面が黒灰色、断面が灰色を呈する。讃岐産の瓦である。堀 160 出土。瓦 13～21 は剣頭文軒平瓦である。瓦当部の成形はいずれも折り曲げ技法による。瓦 15 と瓦 21 の平瓦部凹面にヘラ記号が認められる。瓦 13 は、瓦当部凹面は横方向ヘラケズリ、凸面は横方向ナデを施す。平瓦部凹面の布目は粗く、凸面は圧痕が顕著に残る。胎土は精良で砂粒をほとんど含まない。焼成は軟質、色調は灰白色を

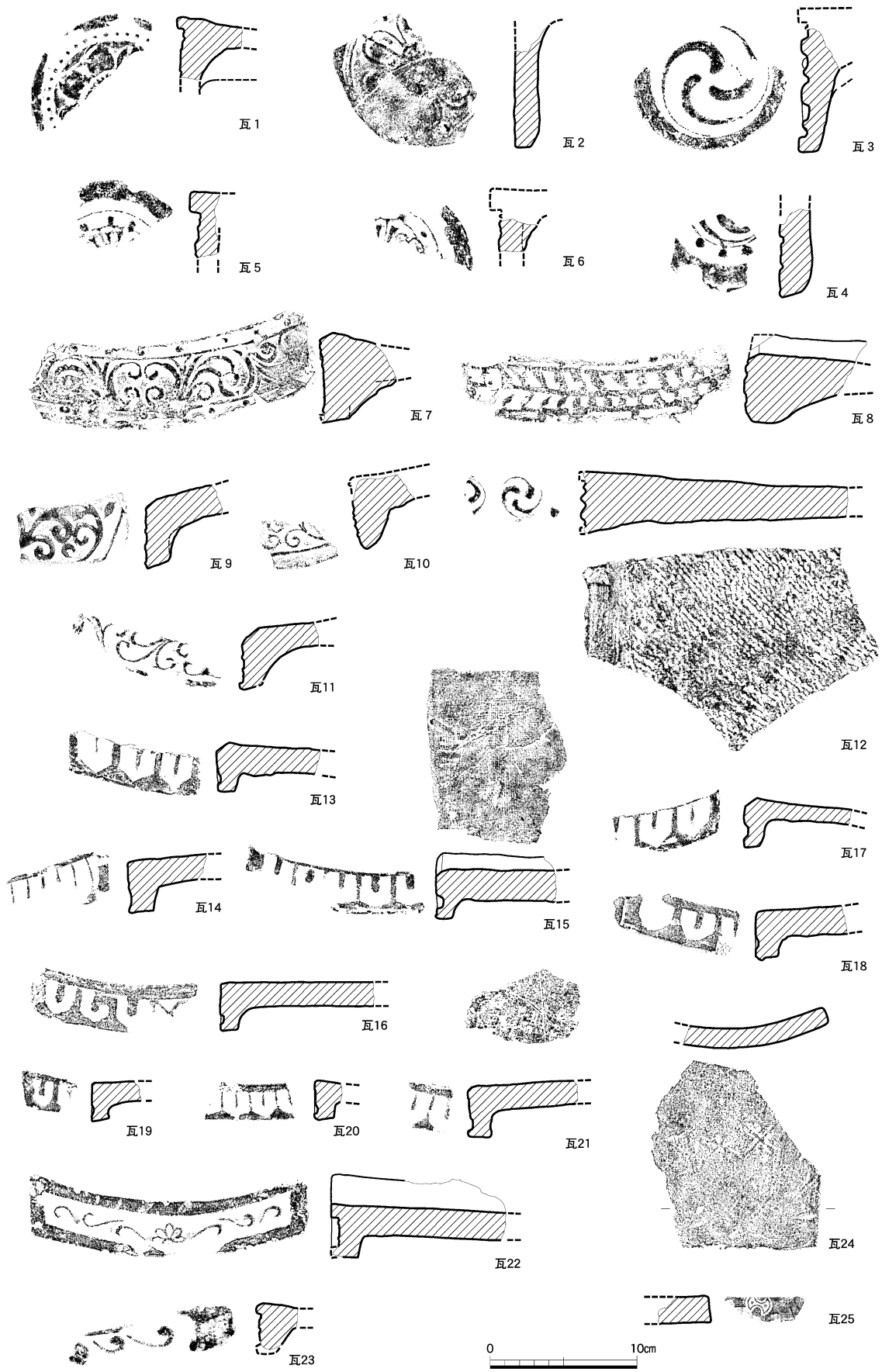


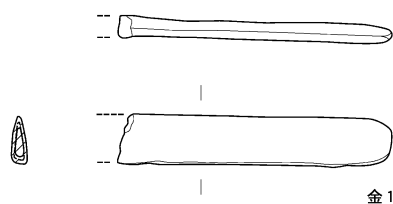
図30 瓦拓影および実測図 (1 : 4)

呈する。瓦 14～19 は、いずれも平瓦部凹面の布目は細かく、凸面は指などによる圧痕をヘラ状工具による縦方向のナデによって平滑に仕上げている。胎土には白色粒を少量含む。色調は橙色を呈し 2 次焼成を受けている。瓦 13・17・19 は第 5 面整地層、瓦 14 は第 4 面整地層、瓦 15 は溝 156、瓦 16・18・20 は堀 160、瓦 21 は土坑 74 から出土している。瓦 22 は菊花唐草文軒平瓦である。瓦当部凹凸面は横方向ナデを施す。平瓦部は、凹面はナデによるが斜め方向のコビキ痕をわずかに残し、凸面はヘラ状工具による縦方向ナデを施す。胎土には砂粒をほとんど含まない。焼成は硬質で、色調は内外面が黒灰色、断面が灰色を呈する。堀 160 出土。瓦 23 は菊花唐草文軒平瓦である。表面の磨滅が著しく、調整は不明である。胎土には黒色粒を少量含む。焼成はやや軟質で、色調は内外面が黒灰色、断面が灰白色を呈する。土坑 82 出土。

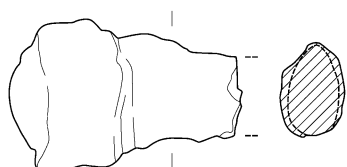
瓦 24 は平瓦である。凸面に格子状タタキが微かに認められる。凹凸面に離れ砂が残る。胎土はやや粗く白色粒を含む。焼成は硬質で、色調は橙灰色を呈し 2 次焼成を受けている。堀 160 出土。瓦 25 は平瓦である。端部に分銅形の刻印を押す。第 1 面整地層出土。

### (3) 金属製品 (図 31、図版 13)

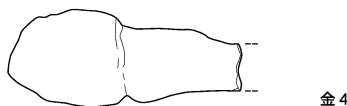
金 1 は、竈 66 の埋土から出土した銅製品である。残存長 7.2 cm、幅 1.3 cm、厚みは最大で 5 mm



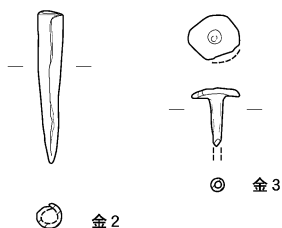
ある。重量は 13.75 g。割れ面の観察では、内部に刀子状のものが納められているように見受けられるが、X線写真と磁石に反応しないことから内部も鉄製ではなく銅製と考えられる。



金 2 は第 2 面整地層から出土した銅製品である。長さ 4.0 cm、直径 7.5 mm、重量は 4.24 g ある。薄い銅板を巻きつけて先端を尖らせ鉞状にしており、中は空洞である。



金 3 は竈 66 埋土から出土した銅製品である。先端を欠損する。残存長は 1.5 cm、重量は 0.93 g ある。鉞の形状を呈するが、中心は空洞となっており、飾り金具の可能性もある。



金 4 は、溝 120 から出土した刀状鉄製品である。残存長 6.1 cm、頭部の最大幅 3.8 cm、厚みは最大で 2.5 cm ある。重量は 79.15 g ある。頭部と刃部の間に段差が付く。割れ面の観察では、全体的に厚く、刃先も丸みを帯びることから刀であるかは不明である。



図 31 金属製品実測図 (1 : 2)

金 5・6 は、竈 66 埋土から出土した板状鉄製品である (図版 13)。他にも同様の小破片が複数出土



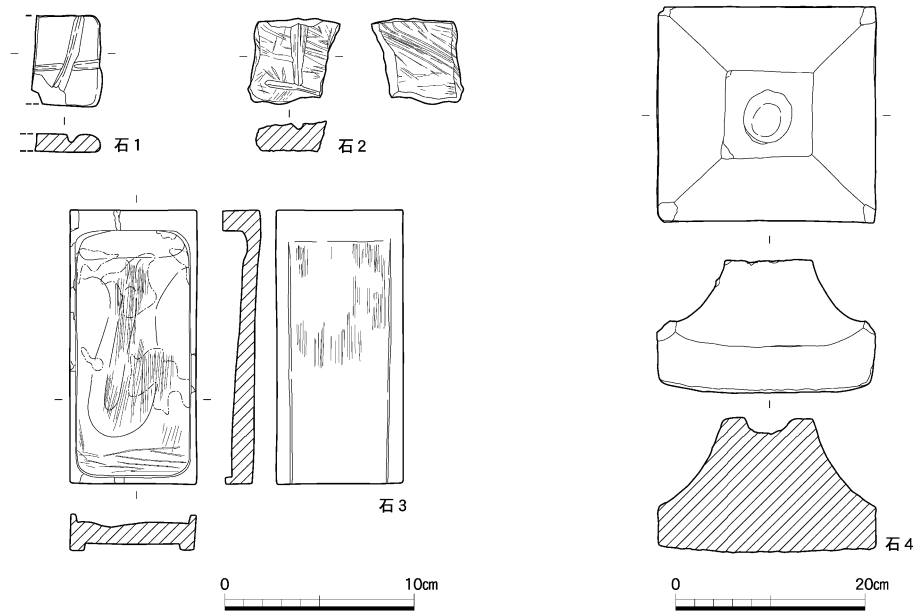


図 32 石製品実測図（1：4、1：8）

している。金 5 は残存長 8.2 cm、最大幅 5.2 cm あり、重量は 91.07 g ある。厚く鉄錆が付着するが、断面から、本来の厚みは 6～9 mm と推測される。金 6 は、残存長 13.5 cm、最大幅 5.3 cm あり、重量は 141.79 g ある。断面観察から推測される厚みは 5～6 mm ある。わずかに湾曲する。これらは、出土遺構の性格から鉄釜の破片である可能性がある。

#### （4）石製品（図 32、図版 13）

石 1 は第 2 面整地層から出土した砥石である。最大長 4.8 cm、最大幅 3.7 cm、厚みは最大で 1.0 cm ある。石材は赤褐色の粘板岩系である。深さ 3.5 mm と 0.5 mm の砥溝がはしる。

石 2 は第 4 面整地層から出土した砥石である。最大長 4.5 cm、最大幅 4.6 cm、厚みは最大で 1.5 cm ある。石材は滑石。表裏面と側面にも砥溝が多数はしる。

石 3 は土坑 74 から出土した硯である。最大長 14.5 cm、最大幅 6.7 cm、厚みは最大で 2.0 cm ある。石材は暗灰色の粘板岩系である。陸部には磨り溝がはしり、海部、陸部ともに墨が付着する。

石 4 は竈 57 周囲の礎石に転用された五輪塔の火輪である。石材は花崗岩。平面形は、一辺約 23 cm のほぼ正方形である。4 隅の跳ね上がり部先端は欠損する。

#### 註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第 3 号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996 年
- 2) 『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編』大宰府市教育委員会 2000 年

表4 土器・陶磁器類一覧表

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
1	土師器	皿	落ち込み118	9.5	1.6		80	7.5YR7/4にぶい橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ・雲母含む	
2	土師器	皿	落ち込み118	9.7	1.4		80	10YR7/4にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	
3	土師器	皿	落ち込み118	9.8	1.6		90	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
4	土師器	皿	落ち込み118	9.8	1.6		100	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・クサリレキ・雲母含む	
5	土師器	皿	落ち込み118	9.9	1.5		100	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・クサリレキ・雲母含む	
6	土師器	皿	落ち込み118	9.9	1.8		80	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
7	土師器	皿	落ち込み118	10.0	1.3		25	7.5YR5/4にぶい褐色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	
8	土師器	皿	落ち込み118	9.9	1.6		80	7.5YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
9	土師器	皿	落ち込み118	9.9	1.5		60	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
10	土師器	皿	落ち込み118	10.1	2.1		100	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
11	土師器	皿	落ち込み118	10.7	2.1		80	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
12	土師器	皿	落ち込み118	14.4	2.5		25	2.5Y6/2灰黄色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	
13	土師器	皿	落ち込み118	14.6	3.1		80	10YR2/3にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
14	土師器	皿	落ち込み118	14.9	2.8		40	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・クサリレキ・雲母含む	
15	土師器	皿	落ち込み118	15.4	3.2		60	10YR7/3にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
16	土師器	皿	落ち込み118	15.2	2.9		20	7.5YR7/4にぶい橙色 チャート・クサリレキ・雲母含む	
17	須恵器	鉢	落ち込み118	26.8			15	N5/0灰色 石英・長石・チャート含む	
18	灰釉陶器	椀	落ち込み118			3.7	底部100	N7/0灰白色 石英・長石・黒色砂粒含む	
19	瓦器	椀	落ち込み118	14.6			15	N6/0灰色 チャート・雲母含む	
20	瓦器	椀	落ち込み118	15.4			20	N7/0灰白色 チャート・黒色砂粒含む	
21	輸入陶磁器 白磁	椀	落ち込み118	15.2	5.5	7.2	25	胎土N8/0灰白色、釉5GY8/1灰白色	
22	輸入陶磁器 白磁	椀	落ち込み118	15.7	6.4	6.1	60	胎土5Y7/1灰白色、釉5Y7/2灰白色	
23	土師器	皿	土坑177	9.9	1.5		30	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・雲母含む	
24	土師器	皿	土坑177	9.4	2.0		20	7.5YR8/4浅黄橙色 クサリレキ・雲母含む	
25	土師器	高杯	土坑177				20	10YR7/2にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
26	輸入陶磁器 青磁	蓋	土坑177	5.4			80	断面N6/0灰色、外面露胎部7.5YR4/2灰褐色、釉10Y5/2オリーブ灰色 黒色砂粒多量含む	越州窯系か
27	土師器	皿	溝120	8.2	1.2		90	7.5YR8/3浅黄橙色 石英・長石含む	
28	土師器	皿	溝120	8.6	1.4		40	5YR7/6橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
29	土師器	皿	溝120	9.0	1.2		20	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・雲母い含む	
30	土師器	皿	溝120	8.8	1.3		25	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石含む	
31	土師器	皿	溝120	9.0	1.7		25	10YR8/1灰白色 石英・長石含む	
32	土師器	皿	溝120	9.0	1.7		30	10YR8/2灰白色 石英・長石含む	
33	土師器	皿	溝120	9.4	1.7		70	7.5YR8/3浅黄橙色 石英・長石・雲母含む	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
34	土師器	皿	溝120	9.5	1.8		60	10YR8/2灰白色 石英・長石・雲母含む	
35	土師器	皿	溝120	9.5	1.5		25	10YR8/6黄橙色 石英・長石含む	
36	土師器	皿	溝120	9.8	2.1		25	10YR8/2灰白色 石英・長石・チャート含む 雲母含む	
37	土師器	皿	溝120	10.0	1.9		70	10YR8/2灰白色 石英・長石・チャート含む	
38	土師器	皿	溝120	10.1	2.1		50	7.5YR8/2灰白色 チャート・雲母・石英・長 石含む	
39	土師器	皿	溝120	13.2	2.4		20	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート含 む	
40	土師器	皿	溝120	13.0	2.6		25	5YR8/4淡橙色 雲母・石英・長石・クサリレ キ含む	
41	土師器	皿	溝120	13.8	2.6		20	7.5YR8/3浅黄橙色 石英・長石含む	
42	土師器	皿	溝120	14.2	3.0		50	10YR8/2灰白色 石英・長石含む	
43	土師器	皿	溝120	14.4	2.4		25	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石含む	
44	土師器	皿	溝120	14.4	3.1		40	5YR8/4淡橙色 石英・長石・チャート・クサ リレキ含む	
45	土師器	皿	溝120	15.0			30	10YR8/2灰白色 石英・長石含む	
46	土師器	皿	溝120	15.6	2.3		40	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・雲母含む	
47	土師器	甕	溝120	15.9			10	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・雲母・クサ リレキ含む	
48	瓦器	皿	溝120	10.6	1.7		70	N4/0灰色	
49	瓦器	椀	溝120	13.6			20	N4/0灰色 石英・長石・雲母含む	
50	瓦器	椀	溝120	14.6			15	N4/0灰色	
51	瓦器	椀	溝120	15.0			30	N3/0暗灰色 石英・長石含む	
52	瓦器	椀	溝120	15.4			60	N5/0灰色	
53	瓦器	椀	溝120	16.2			15	N4/0灰色	
54	輸入陶磁器 白磁	椀	溝120	11.0			20	釉10Y8/1灰白色	
55	輸入陶磁器 白磁	椀	溝120	15.3			10	釉7.5Y7/1灰白色	
56	土師器	皿	第5面整地層	6.6	1.2		25	10YR7/3にぶい黄橙色 チャート・雲母含む	
57	土師器	皿	第5面整地層	8.4	1.4		50	7.5YR7/3にぶい橙色 石英・長石・雲母含む	
58	土師器	皿	第5面整地層	9.0	1.3		30	10YR7/2にぶい黄橙色 石英・長石・雲母含 む	
59	土師器	皿	第5面整地層	9.0	1.5		40	7.5YR7/3にぶい橙色 石英・長石・雲母含む	
60	土師器	皿	第5面整地層	9.2	2.0		40	10YR7/2にぶい黄橙色 石英・長石・雲母含 む	
61	土師器	皿	第5面整地層	13.0	2.2		20	7.5YR6/3にぶい褐色 チャート・クサリレキ ・雲母含む	
62	土師器	皿	第5面整地層	15.0	2.5		25	7.5YR7/4にぶい橙色	
63	土師器	皿	第5面整地層	15.0	2.9		20	7.5YR7/3にぶい橙色 石英・長石・チャート ・クサリレキ・雲母含む	
64	土師器	皿	第5面整地層	16.0	2.5		25	7.5YR7/4にぶい橙色 石英・長石・雲母含む	
65	白色土器	皿	第5面整地層	8.0	1.4		30	外面7.5YR8/2灰白色、内面10YR3/1黒褐色	
66	白色土器	皿	第5面整地層			6.0	底部90	10YR8/1灰白色 石英・長石・チャート少量 含む	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
67	白色土器	高杯	第5面整地層	9.2			杯部50	10YR8/2灰白色	
68	山茶椀	椀	第5面整地層			7.4	20	5Y7/1灰白色 石英・長石・チャート含む	
69	山茶椀	椀	第5面整地層			8.8	20	10YR7/1灰白色 石英・長石・チャート含む	
70	輸入陶磁器 白磁	椀	第5面整地層	10.5			20	釉5Y8/1灰白色	
71	輸入陶磁器 白磁	椀	第5面整地層			6.0	30	釉5Y7/1灰白色	
72	土師器	皿	土坑101	6.0	2.0		70	10YR8/2灰白色	
73	土師器	皿	土坑101	6.5	1.7		90	10YR8/1灰白色 石英・長石・チャート含む	
74	土師器	皿	土坑101	6.8	1.7		100	10YR8/2灰白色 石英・長石・チャート含む	
75	土師器	皿	土坑101	10.7	3.0		90	10YR8/2灰白色 石英・長石・雲母含む	
76	土師器	皿	土坑101	10.9	2.9		90	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石含む	
77	土師器	皿	土坑101	11.2	2.8		95	10YR8/1灰白色 石英・長石・チャート・雲母含む	
78	土師器	皿	土坑101	11.2	2.7		95	10YR8/2灰白色 石英・長石・チャート含む	
79	土師器	皿	土坑101	11.6	2.8		100	10YR8/2灰白色 石英・長石・チャート含む	
80	土師器	皿	土坑101	11.6	3.2		50	10YR8/1灰白色 石英・長石・チャート含む	
81	土師器	皿	土坑101	11.8			20	10YR8/1灰白色 石英・長石・クサリレキ含む	
82	土師器	皿	土坑101	11.9	3.0		30	10YR8/1灰白色	
83	土師器	皿	土坑101	12.0	2.9		40	10YR8/2灰白色	
84	土師器	皿	堀160	8.3	2.0		90	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	
85	土師器	皿	堀160	10.1	2.6		70	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・雲母含む	
86	土師器	皿	堀160	11.0			20	10YR8/3浅黄橙色	
87	土師器	皿	堀160	11.3	3.0		30	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・チャート含む	
88	土師器	皿	堀160	11.8	2.4		95	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・チャート含む	
89	土師器	皿	堀160	16.2	3.7		25	7.5YR8/3浅黄橙色 石英・長石含む	
90	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	堀160	6.3	3.3		70	胎土10YR8/2灰白色、釉10YR2/3黒褐色	天目茶椀
91	土師器	皿	竈57埋土	10.2			25	10YR7/2にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
92	土師器	皿	竈57埋土	10.5	2.1		20	7.5YR7/2明褐灰色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	灯明皿
93	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	竈57炭層	11.5			15	胎土2.5Y8/2灰白色	天目茶椀
94	施釉陶器 肥前系	椀	竈57埋土			5.0	30	胎土10YR6/3にぶい黄橙色、釉10YR6/2オリブ灰色	
95	土師器	皿	竈57掘形	10.3	1.9		10	7.5YR7/4にぶい橙色	灯明皿
96	土師器	皿	竈57掘形	10.6			10	7.5YR8/3浅黄橙色 チャート含む	灯明皿
97	焼締陶器 備前	甗	竈57掘形				口縁5	10R4/2灰赤色	
98	焼締陶器 信楽	擂鉢	竈57掘形				口縁10	2.5YR5/6明赤褐色	擂目5条1単位
99	焼締陶器 信楽	擂鉢	竈57掘形				口縁20	2.5YR4/4にぶい赤褐色	擂目4条1単位

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
100	焼締陶器 信楽	播鉢	竈57掘形				口縁20	2.5YR5/6明赤褐色	播目5条1単位
101	施釉陶器 瀬戸	鉢	竈57掘形	13.2	4.2	7.9	20	胎土7.5YR8/2灰白色、釉7.5Y6/3オリーブ黄色	
102	土師器	皿	竈66炭層	14.6			10	10YR7/3にぶい黄橙色 石英・長石・クサリレキ含む	
103	施釉陶器 肥前系	椀	竈66埋土	11.4			25	胎土7.5YR5/3にぶい褐色、釉7.5Y5/3灰オリーブ色	
104	土師器	皿	落ち込み63	10.2	2.0		35	7.5YR7/4にぶい橙色 石英・長石・雲母含む	灯明皿
105	土師器	皿	落ち込み63	10.4			25	10YR7/3にぶい黄橙色 石英・長石・クサリレキ含む	灯明皿
106	土師器	皿	落ち込み63	13.8			15	7.5YR7/3にぶい橙色 石英・長石・雲母含む	
107	焼締陶器 信楽	播鉢	落ち込み63				15	2.5YR5/6明赤褐色	播目5条1単位
108	施釉陶器 肥前系	皿	落ち込み63	10.3	1.9		50	胎土2.5Y7/1灰白色、釉7.5Y6/3オリーブ黄色	
109	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	落ち込み63			4.8	底部100	胎土2.5Y8/2灰白色、釉5YR4/3にぶい赤褐色	
110	土師器	皿	土坑210	10.6			40	7.5YR6/4にぶい橙色 石英・長石・チャート含む	
111	土師器	皿	土坑210	10.5	1.9		60	7.5YR7/4にぶい橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	灯明皿
112	土師器	皿	土坑210	10.7	2.3		25	7.5YR7/4にぶい橙色 石英・長石・クサリレキ含む	灯明皿
113	土師器	皿	土坑210	10.8	2.2		40	7.5YR6/4にぶい橙色 石英・長石・チャート含む	灯明皿
114	土師器	皿	土坑210	10.9	2.1		60	5YR7/4にぶい橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	灯明皿
115	土師器	皿	井戸153	7.0	1.3		20	5YR6/6橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
116	焼締陶器 信楽	播鉢	井戸153				10	5YR6/4にぶい橙色 石英・長石・チャート含む	播目5条1単位
117	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	井戸153			10.0	10	胎土5Y8/1灰白色、釉5Y2/1黒色	
118	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	井戸153	11.6	5.8	4.4	20	胎土2.5Y8/3淡黄色	天目茶椀
119	施釉陶器 肥前系	椀	井戸153			4.3	50	胎土2.5YR6/4にぶい橙色、釉2.5Y5/4黄褐色・2.5Y8/2灰白色	
120	土師器	皿	石組207	8.8	1.9		40	10YR8/4浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
121	土師器	皿	石組207	8.4	1.9		20	7.5YR8/4浅黄橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ含む	
122	施釉陶器 瀬戸美濃	壺	石組207			8.8	底部20	胎土N7/0灰白色	
123	土師器	皿	土坑74	5.4	1.1		50	10YR6/2灰黄褐色 石英・長石・チャート・雲母含む	
124	土師器	皿	土坑74	9.4	2.1		35	10YR7/2にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ・雲母含む	灯明皿
125	土師器	皿	土坑74	9.2	2.2		100	5YR7/6橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	灯明皿
126	土師器	皿	土坑74	9.3	2.3		80	7.5YR7/3にぶい橙色 石英・長石・雲母・クサリレキ含む	灯明皿
127	土師器	皿	土坑74	10.5	2.2		100	5YR7/6橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	灯明皿
128	土師器	壺	土坑74	3.7	7.2		100	5YR7/6橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
129	施釉陶器 瀬戸美濃	小壺	土坑74	2.5	3.6	6.5	60	胎土2.5Y7/2灰黄色	天目釉 茶入
130	施釉陶器 肥前系	皿	土坑74	9.2	3.1	3.8	100	胎土7.5YR5/6明褐色、釉2.5GY5/1オリーブ灰色	
131	施釉陶器 肥前系	皿	土坑74	13.6	3.0	5.4	90	胎土N7/0灰白色、釉10Y6/2オリーブ灰色	内面底部、高台裏にトチン痕3ヶ所あり。
132	施釉陶器 肥前系	椀	土坑74			4.6	50	胎土7.5YR5/4にぶい褐色、釉10Y7/1灰白色	

No.	器種	器形	遺構名	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存(%)	色調胎土	備考
133	施釉陶器 肥前系	椀	土坑74	10.4	6.3	4.6	90	胎土N6/0灰色、釉10Y6/2オリーブ灰色	
134	施釉陶器 瀬戸美濃	椀	土坑74	11.4	6.4	4.7	60	胎土2.5Y8/3淡黄色	天目茶椀
135	土師器	皿	炉1	9.2	1.9		25	10YR7/4にぶい黄橙色 石英・長石・クサリレキ・雲母含む	
136	土師器	皿	炉1	11.0	1.8		25	10YR7/4にぶい黄橙色 石英・長石・チャート・クサリレキ・雲母含む	
137	土師器	皿	炉1	12.0			30	2.5Y7/2灰黄色 石英・長石・チャート・雲母含む	
138	土師器	塩壺	炉1	6.3	11.7		100	5YR6/6橙色 石英・長石・チャート含む	「天下一・・・」のスタンプ
139	焼締陶器 信楽	播鉢	炉1				口縁20	2.5YR4/4にぶい赤褐色	播目7条1単位、回転ナデ
140	焼締陶器 丹波	播鉢	炉1	41.8	17.2	14.6	10	2.5Y5/3黄褐色	
141	施釉陶器 肥前系	椀	炉1	9.6			25	胎土N6/0灰色、釉5GY8/1灰白色	
142	施釉陶器 京焼	椀	炉1	12.4	6.6	4.3	50	胎土2.5Y8/2灰白色、釉2.5Y7/2灰黄色	
143	施釉陶器 肥前系	鉢	炉1	19.4			口縁40	胎土2.5Y5/3にぶい赤褐色、釉2.5Y5/1赤灰色	
144	施釉陶器 肥前系	片口鉢	炉1	20.6			15	胎土5YR4/6赤褐色、釉5YR6/1褐灰色	
145	磁器 肥前系白磁	杯	炉1	6.6			30		
146	土師器	皿	土坑17	11.7			25	7.5YR7/4にぶい橙色 チャート・クサリレキ・雲母含む	
147	土師器	皿	土坑17	12.5	2.0		25	10YR7/4にぶい黄橙色 チャート・クサリレキ・雲母含む	
148	土師器	焙烙	土坑17	14.9			20	10YR8/3浅黄橙色 石英・長石・チャート・雲母含む	
149	施釉陶器 肥前系	椀	土坑17	11.6	5.3	4.3	60	胎土2.5Y7/2灰黄色、釉10YR5/3にぶい黄橙色	
150	施釉陶器 京焼	椀	土坑17	12.2	5.2	4.4	80	胎土2.5Y7/2灰黄色、釉5Y7/3浅黄色	
151	磁器 肥前系染付	椀	土坑17	10.7			25		
152	磁器 肥前系染付	椀	土坑17	10.4	5.7	4.1	50		底部外面施釉
153	磁器 肥前系染付	皿	土坑17	13.3	3.4	4.3	80		底部外面露胎
154	磁器 肥前系染付	皿	土坑17	13.7	4.0	4.6	100		底部外面露胎

## 5. ま と め

### (1) 調査地の遺構の変遷

今回の調査では、平安時代から江戸時代までの各時期の遺構と遺物が見つかった。これは、文献史料にも記されているように、当町が平安時代以来、内親王や上皇の御所、二条摂関家の邸宅、織田信長の京屋敷という歴史の変遷をたどったことを反映した結果と考えられ、大きな成果といえる。以下に遺構の変遷を概略する。

今回見つかった中で最も古い遺構は、1区第6面で見つかった落ち込み118と土坑177である。いずれも11世紀後半の遺物が出土しており、特に落ち込み118からはまとまった量の遺物が出土し、2次焼成を受けた瓦や土器片も見受けられた。当地にあった陽明門院禎子内親王の御所が承暦四年(1080)に焼失しており<sup>1)</sup>、この火災にともなう廃棄物処理土坑である可能性が考えられる。これらの遺構から良質の白磁碗や青磁の水注蓋などの高級輸入陶磁器が出土していることも御所との関連を示唆するものと捉えられる。同じ第6面では三条坊門小路北築地内溝と考えられる東西溝120が見つかった。溝芯は築地想定線の北約3mにはしる。溝120は12世紀末頃の多量の遺物を含み、この頃までに埋められたと考えられる。後鳥羽上皇の押小路殿が所在した時期にあたる13世紀前葉の遺構・遺物は極めて少ない。調査地は三条三坊十町の南端であり、宅地内であっても活発に利用された場所ではなかった可能性が高い。1区第5面で検出した13～14世紀初頭の落ち込み151や63も、北東から南西へと低くなる旧地形を踏襲したものであり、十分な整地がなされているとは言い難く、敷地の縁辺部の様相を呈している。室町時代前期の14世紀半ば頃にこの落ち込みが埋められ、調査地全体が整地される(1区第4面)。この面の標高は、39.1m前後である。調査地の北側では、過去の調査でこの時期に洲浜をともなう池200が整備されている(図4-4)。この池の汀から陸地部の標高は39.0～39.1mであり、今回の成果とも矛盾しない。ただし、今回の調査地の1区北東部から2区東部にかけてのこの時期の標高は39.2～39.3mと周囲よりやや高くなっており、築山状の景観を想定し得る。また、今回の調査ではこの池200の南側の汀の発見が期待されたが、調査区内では検出されなかった。1区西端では東から西に傾斜する浅い落ち込み63が検出された。洲浜状の施設などは伴わないが、落ち込みの肩に沿うように区画溝と考えられる南北方向の溝92・93と瓦敷きがあり、園池の一部と見ることもできよう。この後、室町時代後期には1区と2区の東端で検出した南北方向の堀160が開削される。この堀は幅3m以上、深さも1m以上あり、宅地内部の区画溝とは考え難く、その性格が問題となるため、次章で検討を加える。16世紀後半頃にこの堀が埋められ整地される。これは、天正四年(1576)にはじまる織田信長の二条御新造の造営に伴うものである可能性が高い。この整地層上面(1区第3面)では浴室遺構と考えられる遺構をはじめ、多数の遺構が見つかった。室町時代後期には目立った遺構は掘しかなく、二条御新造の造営により土地利用が活発化した様子が窺える。第3面で見つかった遺構は多くが17世紀初頭に埋められている。二条新御所の廃絶後しば

らく放置され、慶長十三年（1608）年からの両替町の設置に伴い新たに整地を行ったと考えられる。1区第2面では炉跡や鉄滓・銅滓を含む土坑など、両替町に関連すると考えられる遺構が多数検出された。続く江戸時代中期から後期の遺構面（1・2区第1面）では、多数の井戸や石室、土取り穴を転用した廃棄物処理土坑などが見つかり、当地が町屋として利用されたことがわかる。また、井戸の配置から町屋は両替町通に間口を開いていたと考えられる。土取り穴は大半が2区で検出された。1区は三条坊門通と両替町通の交差点北西角にあたり、両通りに面することから土取りや廃棄物の処理に利用されなかったのであろう。また、このことが、平安京左京域において奇跡的に江戸時代以前の各遺構面の残存状況を良好にしたとも言える。

## （2）堀 160 の性格について

1区第4面、2区第2面で検出した南北方向の堀 160 は、前述したように幅 3 m 以上、深さ 1 m 以上あり、調査地内では約 9 m 分を検出したが、さらに北と南にも延長すると考えられる。出土遺物や遺構の重複関係から見て、15 世紀後半から 16 世紀半ば頃に機能したものと考えられる。これは二条殿が存続した時期であり、それを東西に二分する堀となればその性格が問題となる。宅地内の区画溝の規模を逸脱しており、また流水の痕跡が認められないことから水路としての利用も考えにくい。規模や形状から見れば、町組を囲う「構」の堀に匹敵する<sup>2)</sup>。また、この堀を挟んで、東西で室町時代後期の遺物の出土量にも差異が認められる。今回の調査では、堀 160 をのぞいて、当該時期の遺構・遺物の出土はほとんど認められない。調査地の北側で行われた調査（図 4-4）でも、園池は存続するものの室町時代後期の遺物は極めて希薄である。一方、調査地東側で行われた調査（図 4-6）では、この時期の遺物が一定量見受けられる。つまり、主殿があったと考えられる東側と、園池があった西側は堀で分断され、西側の園池部分はほとんど機能していなかったとの推測が可能になる。

これについて、文献史料から二条家を研究した小川剛生氏は、文明年間以後の二条家は零落著しく、それに伴いその邸宅であった二条殿も没落し、荒廃していたと指摘する<sup>3)</sup>。当主が任国に赴き、不在となった二条殿に見物人が勝手に入り込んだり、盗賊の被害を受けたことが当時の貴族の日記にも記されている。小川氏はそうした事実を踏まえ、室町時代後期の洛中の様子を描いたとされる上杉家所蔵洛中洛外図屏風（上杉本）などに見られる池に臨んだ桧皮葺と板葺の殿舎から池水を眺める優雅な二条殿の姿は、当時の実態とはあまりにもかけ離れ、写実的なものとは言い難いとしている<sup>4)</sup>。これは、宅地内に堀が掘削されたり、遺物の出土量が極めて少ないという今回の成果と矛盾しない。

しかし、この堀が「構」としての防御的な性格を持つのか、その場合どの範囲を囲うものであるのかなどについては未だ不明な点が多い。調査地の北約 200 m で実施された調査（図 4-1）では、今回の堀 160 を北に延長した箇所でも同時期の堀跡が見つまっている。押小路通を超えて両者がつながるのであれば、二条殿だけではなく、さらに広い範囲を囲うものとなり「構」の堀である可能性が高まるが、現状では不明であり、今後の調査における重要な課題である。



### (3) 浴室遺構について (図 33 ~ 35)

1区第3面では竈2基、土間、井戸からなる遺構群が見つかった。遺構群は東西約7m、南北約6mの範囲に広がる。北、南、西は調査区外に展開する。出土遺物や層位的関係から16世紀後半に成立し、17世紀初頭に埋められたと考えられる。大小2基の竈が焚口を北に向けて東西に並列する。いずれも土間から一段掘り下げる半地下式になっている。東側の規模の大きい竈57は、周囲に方形に礎石が据えられ、礎石の間には河原石が敷き詰められていた。井戸は竈の焚口の北側に位置する。この遺構群については、その特徴、過去の調査例、文献史料などから総合的に見て、蒸し風呂形式の浴室遺構と判断した。その根拠について次に述べたい。

まず、竈と土間、井戸がセットで出土した場合、その性格として考え得るのは浴室遺構以外にも、炊事施設が考えられる。今回の場合、大小の竈が2基並び、しかもそれぞれの規模が一般的な町屋の調査で出土する竈と比較して大きいということが注目された。しかしながら、大規模な町屋では炊事施設として複数の竈を備え、規模が大きいものも認められる。また、酒造りや醤油造り<sup>5)</sup>のような醸造を営む場合にも、多量の米を蒸す必要性から大規模な竈を備えるため、竈の数と規

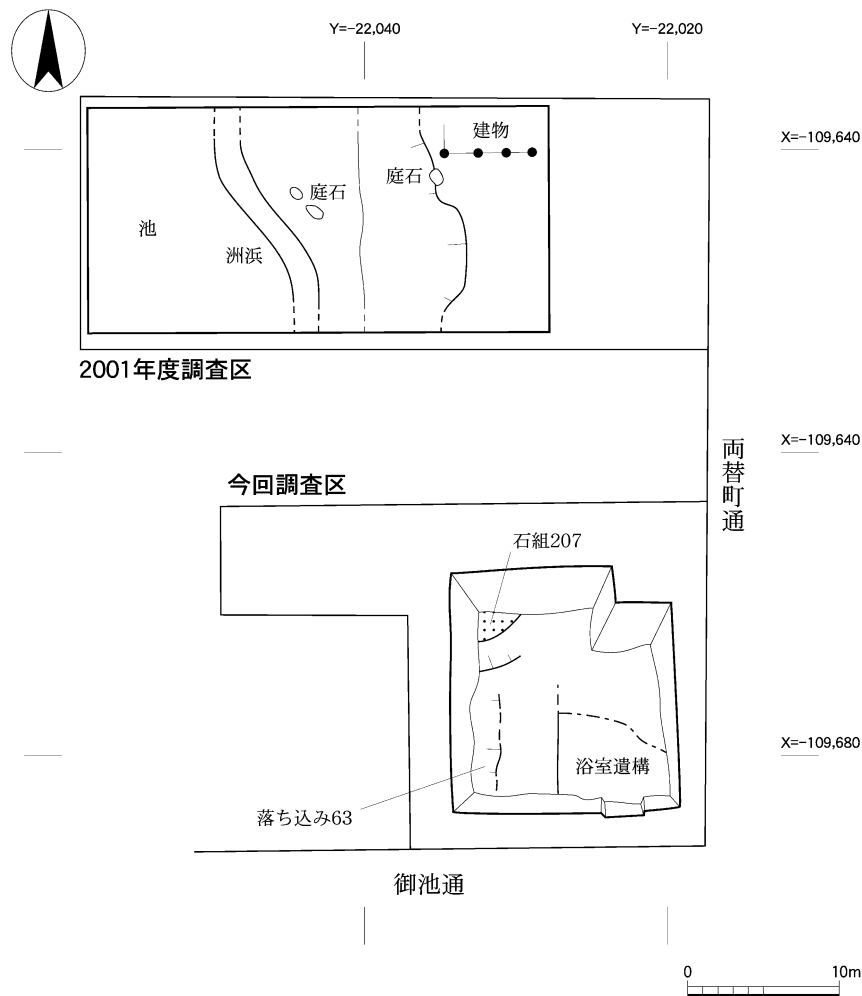


図 33 安土桃山時代遺構配置図 (1 : 500)

模からは浴室か炊事場かの判断できない。また、井戸の存在も、炊事施設でも水を必要とするため浴室遺構とする根拠とはならない。しかし、今回の場合、炊事施設の竈であるとすれば、竈57の周囲の礎石が不必要と考えられる。炊事施設そのものが屋内にある場合が多く、煮炊きの際には妨げとなる覆屋を竈の上に付ける必要性は低い。また、この遺構が成立した16世紀後半は二条殿から二条御新造に移行した時期であるが、いずれも1町規模の宅地であり、過去の調査成果より殿舎は東半あるいは北半にあったと考えられる。そのことから見ても、敷地の南端に炊事施設のみが設けられることは考え難い。

次に、絵巻物などに見られる浴室と比較してみたい。

観応二年（1351）の成立とされる「慕帰絵詞」では、屋外に2基の竈が並び、一方の竈の上に三角形の湯気を送る口を付けて、蒸気を木造板葺の建物内部に送りこんでいる。もう一方の竈では湯を沸かしている。井戸は無いが、竈の隣には水槽が置かれ、懸樋から水を引いている。天文五年（1536）成立の「東大寺縁起絵巻」にも蒸し風呂が描かれる。屋外の大きな竈で湯を沸かし、湯気を送風口から蒸気を建物内に送り込んでいる。また、正安元年（1299）成立の「一遍聖人絵伝」では、礎石建ちの浴室建物に取り付く別棟の建物内の土間に据えられた竈で湯をわかし、樋で湯を送っている。土間の外には井戸があり、水をくみ上げている様子が描かれている。いずれの絵巻物の成立年も今回見つかった遺構の時期を遡るものであるが、「慕帰絵詞」に見られる竈2基の並列や、「慕帰絵詞」「東大寺縁起絵巻」に見られる竈に近接して通る浴室建物の柱筋、「慕帰絵詞」「一遍上人絵伝」に見られる竈に近接して置かれた井戸や水桶などの水を調達する施設の存在などは遺構と類似する点である。

次に、発掘調査の事例について見てみたい。今回見つかった遺構と同時期のものとしては、広島県万徳院跡例、和歌山県根来寺跡例、兵庫県湯山遺跡例、岐阜県千畳敷遺跡例が挙げられる。万徳院跡は吉川元長が天正二年（1574）に建立を開始した寺院跡で、慶長五年（1600）年の吉川氏の岩国移封まで存続した。第2次調査で風呂屋と井戸が見つかった<sup>6)</sup>。桁行三間、梁間二間の東西棟の礎石建物の西半が土間であり、中央やや西寄りに石組みの竈が焚口を西に向け大小2基並列する。建物の周囲には排水路と考えられる溝がめぐる。蒸し風呂施設とされ、中央部に湯殿、東半に揚がり場があったと推定されている<sup>7)</sup>。井戸は風呂屋の南東約10mの箇所に位置する。根来寺坊院跡では16世紀の湯屋跡が見つかった<sup>8)</sup>。礎石建建物の中心に大小の竈が3基並び、その奥は石敷き、手前は土間になっている。土間には水溜め用の埋め甕が並ぶ。石敷き部分は板張りで、その上に風呂屋形が乗る蒸し風呂形式の湯屋跡と考えられている。万徳院・根来寺例とも複数の竈、土間、石敷き、井戸あるいは水溜めの存在など、今回の遺構群と共通する点がある。豊臣秀吉が有馬温泉滞在時の在所として築いた湯山御殿の跡である湯山遺跡でも、安土桃山時代の湯屋と庭園跡が見つかった<sup>9)</sup>。ここでは蒸し風呂と湯に浸かる岩風呂が共存している。蒸し風呂遺構は、1.9m四方に風呂屋形の礎石が並び、その内側に碎石が敷き詰められている。蒸し風呂遺構はもう1基あり、6.8m×4.0mの範囲に粘土が詰め込まれ、周囲に礎石が並べられている。内部は2つに区画され、一方が2段に下がり、床面に竹樋が通っていることから、蒸し風呂と考

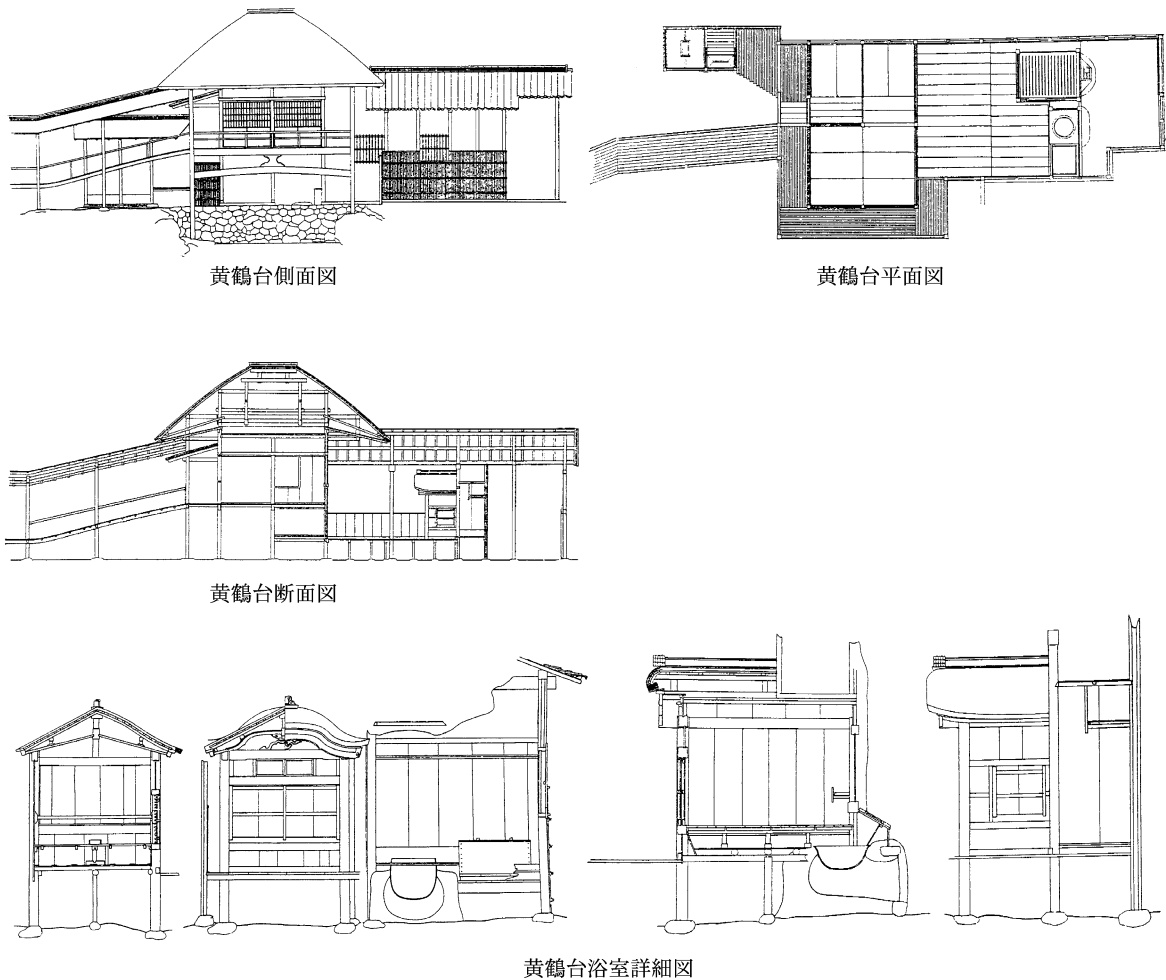


図 34 「黄鶴台」西本願寺蔵（『國寶書院図聚 9 本願寺飛雲閣 本願寺黒書院』より抜粋、一部改変）

えられている。温泉を利用した蒸し風呂であるため、竈や井戸はないが、泉源と考えられる石敷き方形遺構や木樋の跡が見つかっており、風呂屋形の石敷きなど上記 2 遺跡と類似性が認められる。湯屋遺構に面して、小さな滝組をもつ池、植木の移植跡などからなる庭園遺構が広がっている。また、織田信長の居館跡である岐阜城千畳敷遺跡では永禄十年（1567）の織田信長の岐阜城入城以後、慶長五年（1600）までとされるⅡ 1 面で浴室の可能性のある遺構<sup>10)</sup>が見つまっている。チャート<sup>10)</sup>を主体とする石組みの大型の竈 2 基が焚口を接して直交して作られている。うち 1 基の周囲には覆屋の柱穴が検出されている。近接して庭園的施設とされる石敷き遺構が見つまっている。庭園遺構に近接し、二条御新造と同様に信長に関連する遺跡での出土例として興味深い。

さらに、発掘事例とは異なるが、現存する同時期の浴室遺構として西本願寺滴翠園の中に位置する重要文化財本願寺浴室（黄鶴台）がある（図 34）。聚楽第からの移築とも伝わり、少なくとも 17 世紀前葉<sup>11)</sup>までには成立していたと考えられる。黄鶴台は厳密には入浴後の涼み台であり、その裏側に浴室がある。浴室は間口 4.8 m、奥行 6.3 m あり、奥に唐破風造りの風呂屋形（間口 1.6 m、奥行 2.2 m、高さ 2.25 m）が据えられている。風呂屋形には入り口となる引き違い戸がつき、床は簀の子張りでその下に湯釜が据えられている。風呂屋形と並んでかかり湯用の湯釜と水槽が置かれている。浴室の床は総板敷きである。裏手の炊き場は土間で、蒸風呂用とかかり湯用の竈

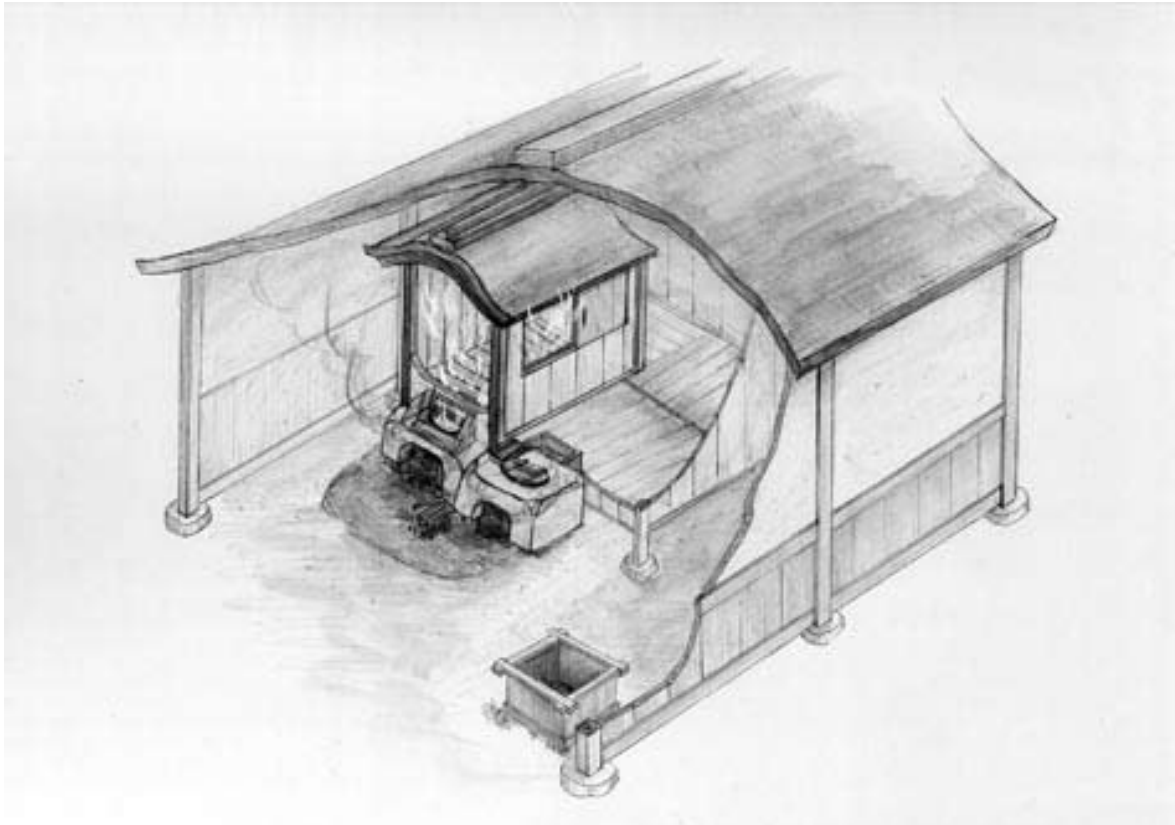


図 35 浴室遺構イメージ図

が2基並ぶ<sup>12)</sup>。今回見つかった竈57の風呂屋形が乗ると推測される礎石の柱間は間口1.5m、奥行1.8mで、黄鶴台のものより一回り小さいものの、それぞれの遺構の配置や空間利用は類似している。

以上のように、発掘調査例と現存する黄鶴台との類似点が多く認められることは、今回の遺構群を浴室遺構とする有力な根拠となろう。

しかし、ここでまたこの浴室遺構が敷地の南端に位置するという立地とその性格が問題となる。先にも述べたように、二条御新造の主殿は敷地東半もしくは北半にあったと考えられることから、この浴室遺構は主殿から離れた独立した施設であったと推定できる。調査地の北側で実施された調査(図4-4)では、室町時代前期に整備された二条殿の園池が、修景を加えられながらも、16世紀後半まで維持され続けていたことが明らかとなっている。園池と今回見つかった浴室遺構との関係を表したのが図33である。これらのことから、この浴室遺構は日常的に使用されるものではなく、滴翠園内に位置する黄鶴台と同様に、園池を望むもてなしの空間に建てられた施設であったと考えられる。沐浴潔斎や修行を目的として古代の寺院に起源をもつといわれる入浴は、中世には寺院から独立し、貴族社会では客を招いて語らう特別な場ともなった。さらに室町時代には茶の湯と結びつき、「淋汗茶湯」と呼ばれる遊興として上流階層に流行したとされる<sup>13)</sup>。入浴が客人をもてなす際に重要な意味をもったとすれば、園池と浴室の結びつきも理解できる。

二条御新造が所在した時期の明確な遺構が見つかったのは今回が初めてであり、その内部空間の一端が明らかになっただけでなく、当時の上流階層の生活様式を知る資料を得られたことも今回の重要な成果と言えよう。

註

- 1) 『百練抄』承暦四年二月一四日条
- 2) 山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 小川剛生「第7章押小路烏丸殿」『二条良基研究』笠間書院 2005年
- 4) 前掲註3に同じ
- 5) 馬場昌子「近畿の近世町屋の台所」『物語ものの建築史 台所のはなし』鹿島出版会 1986年  
また、調査事例としては伏見城城下町跡で17世紀初頭の町屋の内部に幅・奥行ともに約1mある竈が2基並んで見つかった例がある。桜井みどり・南 孝雄「伏見城跡」『平成11年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 6) 『史跡吉川氏城館跡 万徳院跡-第2次発掘調査概要-』広島県教育委員会 1992年
- 7) 『史跡吉川氏城館跡 万徳院跡-第3次発掘調査概要-』広島県教育委員会 1993年
- 8) 『根来寺坊院跡』岩出町教育委員会 2005年
- 9) 『ゆの山御てん-有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の記録-』神戸市教育委員会 2000年
- 10) 『千畳敷Ⅱ』岐阜市教育委員会 1991年
- 11) 小野健吉「養翠園・滴翠園の調査」『奈良国立文化財研究所年報』1997-I 奈良国立文化財研究所 1997年
- 12) 浴室の構造、規模については『國寶書院図聚9 本願寺飛雲閣 本願寺黒書院』洪洋社 1939年、大場 修『物語ものの建築史風呂のはなし』鹿島出版 1986年を参考にした。また、宗教法人本願寺(西本願寺)の御好意により実見の機会を得た。
- 13) 松尾恒一「湯屋の祭儀と芸能」『歴博』第142号 国立歴史民俗博物館 2007年



# 版 图





# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうさんじょうさんぼうじゅっちょうあと・からすまおいけいせき・にじょうどのおいけじょうあと							
書名	平安京左京三条三坊十町跡・烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-20							
編著者名	柏田有香							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年5月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区	26100	1	35度	135度	2010年1月 7日～2010 年3月19日	223m <sup>2</sup>	ビル建設 工事
からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	りょうがえまちどおりあねこうじ 両替町通姉小路		464	00分	45分			
にじょうどのおいけじょうあと 二条殿御池城跡	あがるたついでちよう 上る龍池町448 番1、449番1		471	40秒	31秒			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	集落跡	弥生時代		弥生土器				
烏丸御池遺跡	都城跡	平安時代	土坑、溝、落ち込み	土師器、須恵器、灰釉陶器、白色土器、緑釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品				
二条殿御池城跡	平城跡	鎌倉時代 ～室町時代	土坑、堀、溝、瓦敷き遺構、落ち込み	土師器、須恵器、山茶椀、瓦器、白色土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品				
		安土桃山時代 ～江戸時代	竈、井戸、土間、落ち込み、石組、土坑、炉、溝、石室	土師器、施釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦類、銭貨、金属製品、石製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-20  
平安京左京三条三坊十町跡・  
烏丸御池遺跡・二条殿御池城跡

発行日 2010年5月31日

編集

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷

三星商事印刷株式会社

住所

京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961